

努力の上に花が咲く

第一部教育者の道をたどって

生いたち

私は明治十七年六月一日の生まれになっております。当時は今のよう
に電気はなく、夜ともなればアンドンをともし、車といえは人力車の
ことであります。しかし、世界の帝王の中で最も優れた方とあがめ尊
ばれた明治天皇の御代に、しかも日本の勃興期に生まれた私は実に幸
運児だったと今更ながら有難さで一杯であります。

家は今でいう中農程度の農家で、父徳右衛門はなかなか知恵も多く、
世話好きで当時の福岡県早良郡西新町(現福岡市)における顔役だった
そうであります。母サトは粕屋郡仲原では大農の部に入る末若家の出
で、この人は本当に人情に厚い方でございました。徳右衛門の父即ち
祖父専太と母サトの父長平とは兄弟の間柄ですから、私の父母はいと
こ同士の結婚ということになります。私の兄弟は本来六人ですが、私
がもの心づいたときはそのうちの兄一人が幼没してしまいましたので五人
になっております。長女タミ、長男松次郎、二女が私で、一男関次郎、
三男専吉という順序で、私が八才になるまでは家には祖母ヤス、両親、
子供五人と貧しい中にも睦じく和気あいあいの中に育てられ成長した
ものであります。

運命決めた股関節脱臼

私は小さいときからとても元気がよく、またきかん気の負けずぎらい

のところがあつたそうです。

ちようど四才のとき、近所の子供達と一緒に遊びたわむれていたところ、私が急に足を痛めて泣きわめき始めました。両親が飛んで来て見ると、足が立たなくなっている。早速、その頃はやりの稲荷神社信仰のお婆さんに見せたら「これは、二、三日前にここで崖崩れで死んだ人のたたりだ」という訳で、毎日毎日祈禱ばかりして全快を祈るだけで一向によくなくなる気配はない。それどころか、左モモはますます腫れあがつて熱も高く、朝から晩まで泣き続けていたそうです。遂に困りはてて医者に診てもらい「ボンゲヤ」とかいうとても飲みにくい薬を飲まされたそうですが、この飲みにくい薬を我慢して飲んだ際には両親はじめ祖母も驚いたそうです。とにかく、私は幼いときから気が強かつたのでしよう。このようにして熱もおさまり、たまった膿が左モモから水鉄砲の勢いで出尽くしてしまうとともに痛みもとまり、その後は日一日と快方に向かいました。今でも左モモにそのときの傷あとが残っています。年老いて右膝の関節の痛みの治療でレントゲンを撮ってもらつたときにいろいろと調べてもらいましたが、この幼少の頃の事故は結局股関節脱臼だったことが判りました。医術の進まない時代とはいえ、脱臼の手当さえ正式にしておれば全快していただろうにと思います。このようにして生まれつきならぬ一生の傷となつて残り、私が一生涯不自由をしのばねばならぬ破目となつたのであります。しかし、物は考えようで、今から思いますとこのような身体になつたればこそ私の今日があるのであって、運命の機微はなかなか人間の知恵では容易に推し測られませんか。

左足の痛みがとれて後、両親はよく暇ができたなら豊後(現在の大分県)の温泉に入湯につれて行くと言はせていました。ところが、とうとうこれは実現いたしませんでした。それもそのはずで、この頃はまだ汽車はなし、入湯に行くにも人力車か、歩いて行くよりほかに方法はなく、親が子供をつれて旅することは並大抵のことではなかつたのであります。

兄のお守に入学

左足の故障はなおらずびっこをひきながらも身体はいたって健康で人一倍わるさもひどかったそうです。七歳(数え年)になって小学校に入学することになりました。当時は満七歳で入学するはずのところ、兄松次郎が学校に通うのをいやがるものですから妹の私が兄の監視役としてつけられ、一年早く入学したわけです。この頃の尋常小学校は四年でしたが、必ずしもしいて入学しなくともよい位の時代で、尋常小学校を卒業すればよい方で高等小学校に進む人は男女ともよほど裕福な家庭の子供に限られていた時代であります。

私は尋常小学校一年から四年で卒業するまで優等生で通しました。卒業式のとぎ、西新町長伊勢田宗城氏その他の来賓の前で「孝心なる猿の話」と題した講演をさせられ、来賓の方々から非常な賞賛をいただいたことを今でも憶えております。

若き母の死

子供にとって最も慈愛深き母サトは私が八歳(数え年)のとき、今でいえば流行性感冒にかかり他界いたしました。このときの家庭は、姉夕三の十四歳を頭に、二歳の末弟専吉を含め三男二女と父、それに祖母を遺し三十五歳の若さで病没したのです。このときの父の悲嘆がどんなであったかは想像に余るものがあります。しかし、気骨のあった父はこの程度のこととて運命に負けてはならないと決意を新たにしようであります。当時の農家は大体がよく働くようになっていましたが、父は特によく頑張りました。早朝から夜おそくまで田や畑に出て働き、

姉

と四、五人の雇婦がこれを助けました。年老いた祖母が家の炊事をし、私と長兄は学校から帰ると「カラウス」と言つ米描きの道具で白米に

することを手伝ったものです。

人間というものは苦難の道に立たされると、私どもの当時の家庭のように家族全員が一致団結するものです。私のような小学校に通いはじめたばかりの幼い子供ですら、米描きをして家族が何とかやって行ける力になるものです。甘やかしては我がままな子供しか育ちません。決して強い人間には成長せぬものをつくづく思います。

このような家庭の状態が続き、どうやら落ちついて来つつあるときに、今度は頼りにしていた祖母が八十八歳の高齢で亡くなりました。ちょうど私が高等小学校二年生のときであります。(当時は小学校四年、高等小学校四年)

こうなりますと、炊事の方は平素は人を雇ってやらせていましたが、夏休みや冬休みになると昼食、夕食の用意はわずか十二歳になる私の細腕にかかって来る訳で、家族と雇人計十数人前の食事を引き受けてやることになりました。当時、あの若さでよくやったものとわれながら感心しますが、皆からほめられるのが嬉しさに頑張ったものです。子供を育てる家庭教育の場でも、或いは学校教育に於ても、その年齢に応じそれぞれ独立心を養うように努力させれば、それなりに成長して行くものであることを、私の体験上より痛感いたします。

食事がすむとアンドンの薄暗いあかりの下で、国語、地理や歴史等の本を開いて勉強したり習字や絵等も書いていました。こんなに暗いあかりの下で勉強していましたが、眼が悪くなったかといえばさにあらずで、私八十歳をこえた今日でも眼鏡をかけることは稀で、よほど小さい字を読むとき以外は絶対眼鏡はかけません。

近頃の若い青年学生は実に恵まれていて、電気の煌々たる光の中で勉

強していながら近眼が多く、体格は立派でも、いつも眼鏡をかけているのが不思議でなりません。

また、あまり勉強もせず、夕食がすむとすぐラジオやテレビの前に座りこんで、なかなか動こうとしないのが多いのではないかと思います。この文明の利器も上手に使えば効果も大したものです。が、家庭の教育がしっかりしていないと、かえって勉強の邪魔になります。道徳教育を阻害するような番組も少なくないので、これらの影響によって面白半分で一つやってみようかな などといったの間にか悪の道にふみ入る少年青年も少なくないのではないかと考えます。

幼稚園、小学校時代では学校と家庭とがよく連絡をとってテレビの活用の仕方についてよく訓練しておかなければなりません。中学校、高等学校では時間をきめて教育上弊害あるものを発表する時間には絶対見せないようにすることです。一方において、ラジオやテレビ局はどんなにしたら国民の教育、道徳、文化の進展に役立つかを考えて番組をつくり、害にならぬ程度にやってもらわねば、何でも面白くさえあれば…というような今の調子では実は有難迷惑とさえ思われます。アンドン時代、ランプ時代に大切な青少年時代を過ごされた方々が、戦後の日本の再建の先頭に立ち今日の日本の復興の指導者になられていることを思うとき、明治時代の力強さを感じ、また人創りは必ずしも文明開化のみによるものでもないと感じます。

町長の頼みで高等小学校へ

かくて私は尋常小学校卒業後、すなわち明治二十七年四月に高等小学校に進学、ここで鍛えられること四力年でした。この頃、高等小学校に入学するものは早良郡全域から女子だけではせいぜい三十四、五人程度。よほどのお金持か家柄のうちでないし高等小学校までは進まなかつた時代であります。このように教育程度の低い当時、どうして私

のような農家生まれの、しかも家庭は母を失くして困っている状況の者が高等小学校に入学したかについては、ぜひふれておかねばならない事情があつたのであります。

ときの西新町長は伊勢田宗城氏という方でかねがね同氏は西新町から一人立派な教員を出したいと願つておられました。そこで目をつけられたのが私というわけで、その町長さんは私の父を口説いて農家の手も不足だろうがハルさんをぜひ教員にして欲しい、それには尋常小学校だけで辞めさせるわけにはゆかぬということとなつたのであります。私も高等小学校に進んでから、いつも成績は首席を占めて、卒業いたしました。この頃の高等小学校の存在は、ちょうど現在の高等学校ぐらいに匹敵するのではないかと考えます。この頃の女性は自らをきびしく持する気風が強く、また明治天皇の教育勅語を道德の基盤として朝な夕な訓育を受けていまして、生徒として現在中学、高校に見られるような暴力行為や非行はありませんでした。私が高等小学校四年生のときクラスの女生徒が某青年から手紙を貰つたとかで、私の知らぬ間にクラスの全員から非難され制裁を受けたことがあります。いわゆるクラスの共同制裁で一人でも変な噂を立てられる人があると同級生がそのまま放任せず、団結して矯正して行く風潮があつた訳です。私が級長をしていたものですから、そんなに強く当たるのは可哀想だと止めるくらいで、もちろん組担任の先生はまったく御存じないことでした。

これを今日の中学生や高校生に見ると、生徒の非行が世間に知られ話が大きくなると、担任の先生がうつろたえて本人や父兄に注意はするが、他の生徒は何知らぬ顔で平気。これをクラスや自分たちの恥とも何とも感じていない。中学生や高校生で親の目を盗んで桃色遊びにふけつたり睡眠薬遊びに迷いこんでいる者をときどき聞くが、これをとがめる愛情ある同級生が居ない。気をもみ真剣に取り組んでいるのは担任の先生や校長だけという有様。これからみると、明治時代の学童の道

徳教育と戦後のそれとの間には雲泥の差があるといえます。

日本国民も、こんなに落ちぶれたかと思うとほんとうに情けなくなります。

また、私の高等小学校時代は、あたかもあの有名な明治二十七、八年にかけての日清戦争時代にあたります。この頃の日本人は明治の学校教育、教育勅語の教えを受け、軍人は軍人勅諭により鍛練され忠孝一本個々の家と国とのつながりも強かったものです。国に一旦緩急ある場合に一命を捨てるのを男子の本懐とし、親もそれを名誉の上なしと考えていました。軍人として出征するときには村、町内こぞって日の丸の国旗を振って送ったものです。今だに私の頭の中に当時の模様や万歳の声が残っております。このようなわけで国を挙げて一致団結、戦いはいたるところで連戦連勝、私ども学校の生徒は戦勝の号外が出る度に日の丸の旗を手に手に町中をパレードしたものでした。日本人の頭の中には、日本軍は愛国心に燃え、かつ強いので、戦えば必ず勝つものときめていたくらいです。

姉弟そろって首席

明治三十一年三月、西新尋常高等小学校を首席で卒業いたしました。私のすぐの弟関次郎はこのとき高等小学校一年生から一級とび越えて三年生になっていましたが、成績は私よりはるかによく各学科の得点はほとんど百点、悪くて九五点以上でこの点姉として少々ひげ目を感じていました。このように姉弟二人が同じ高等小学校で首席を占めていましたので、妻を失くした淋しい父は有頂天になって子供のことをいつも自慢しているような風でした。

前にも述べていますように、私は七歳(数え年)で尋常小学校に入学した関係で、高等小学校を卒業して師範学校に入学しようとしても年齢

が二歳足りません。仕方がないので、当時ありました福岡師範学校付属の補習科に入ることになりました。この補習科には師範学校入学準備のために入っている人が三十人ばかり居たように思います。補習科の授業は師範学校の男、女教諭が担当されていました。女教諭では東京女高師御卒業のパリパリの土屋先生、富岡先生、広田先生等がおられ、いつも整然とした服装で美しく、しかも御指導ははきはきしていて若い私の心を強く打つものがありました。これらの先生方の御姿を見れば自然頭が下がり、なにか神々しいものを感じたものです。明治時代の東京女高師御卒業の先生方の態度は、今日では拝むことの出来ないくらい気品高いものがありました。

この補習科時代、私の頭に刻みこまれていることの一つは付属小学校でも、また私共の属している補習科でも、清潔整頓の厳しかったことです。付属小学校の生徒も上級生は薄暗いうちから学校に来ていて便所の掃除などやっていました。私は西新町の自宅から補習科の校舎まで徒歩で通学しているくらいですから、それこそ朝暗いうちに提灯をつけて掃除にかけてつけるといづくあいでした。女の先生が御登校にならないうちにきちんと掃除を終り、先生の御出勤を待つて検査をお願いすると、先生は隅から隅まで見てくださって「ニコニコ顔で」「ハ、ヨク出来マシタ」「御苦労サマ」と簡単に褒めて下さいます。私は先生のお褒めの言葉を頂くのが何より有難く光栄に感じていました。今考えると純真そのものだったのです。

今一つこの補習科時代で忘れえないのは、付属小学校主事をしておられた大久保先生の講堂修身のことであります。まず楽器の音に合わせて歩調を揃えて堂々と講堂に入場、暫く黙想、それから教育勅語の暗誦を命ぜられた生徒の発表。それが済んで最後に大久保先生から訓諭があるのが常でしたが、この講堂修身は私にとりましては修養上非常に為になつたと考えます。

年齢ごまかして師範入学

いよいよ補習科の一カ年間も終り、師範学校の入学試験を受ける段階になりました。しかしさきに述べたように私は小学校に一年早目に入學している関係で、満十五歳には達しておりません。当時師範学校に入学出来るのは満十五歳以上と言う年齢の制限があったわけです。しかし、伊勢田町長が西新町から立派な教育者を一人出さねばとの強い念願で、私にしいて高等小学校や師範学校補習科入学をすすめたいきさつもあって、年齢不足は町役場の方で少し戸籍面をいじり入学試験を受けることができました。当時はその方面は割合のんびりしていたのでしよう。これが明治三十二年二月のことであります。なにさま年齢満十五歳以上でなければ入学出来ないのに、本当は満十四歳と数カ月なので口頭試問でも子供らしいことばかり答えたらしく、校長の浜口先生や補習科のとき教わった土屋先生、富岡先生方から年をもぐつて入学しておくと後でわかるとたいそうな罰金を出さねばならぬがそれでもよいかとひやかされる始末でした。私は伊勢田町長さんから満十五歳と一カ月余るように作っておくからそう答えなさいと指示を受けていましたので「満十五歳と一カ月余ります」と真面目くさつて申すものですから先生方もおかしくなってふき出してしまわれました。

こんなことなので、私も今回は駄目だろうとあきらめて百道松原に松露採りに行っていました。ところが「学校の方から合格の通知が来たよ」との使いがきたのです。私は飛び上がらんばかりにして喜んだことを記憶しています。この頃は高等女学校も全国的に数少なく、中学校といえは県内では修猷館、久留米の明善校、柳川の伝習館くらいのもので、このときこの師範学校に県下からの受験生約九十名のうち三十五名が合格したのであります。私も幸いにその中の一人に入りましたので、父はもとより伊勢田町長さんも大喜びでした。当時の我が国の教育の水準はその程度だったのです。

師範教育のきびしき

この頃の福岡師範学校は今の福岡市荒戸、いわゆる荒津山の麓に一校あるだけでした。男女合同の校舎でしたが、現在いわれているような男女共学ではありません。女生徒は女子だけ、男生徒は男子だけの組編成になっており、したがって授業の時間割も別々です。全寮制で女子寄宿舎は校舎を中心にして西の端にあり男子寄宿舎は東の端にあつて、舎監も女子寄宿舎には女教諭の方がおられました。舎監長は男子の先生でした。寮生活の食事はもちろん、衣服、はき物までいつさい官費支給ですから、あたかもその頃の軍隊と同じ扱いです。

冬着は老人の着るような質素な瓦斯縞のあわせ着、夏着は地味な久留米緋が毎年一枚ずつ支給されます。下着は必ず白地の晒布でこれは各自が作るのですが、衿はすべて白ということになっていました。袴は黒地の毛孺子のお揃いでこれも支給品でした。

食事の作法や夜間の黙学時の厳しさはまた格別、黙学時間中は私語はいつさいできません。座る姿勢も正しく座って横ずわり等は許されませんでした。黙学時間の午後七時から九時までには真剣に勉強したものです。なにしろ県下から僅か三十五名だけしか入っていない優秀生ぞろいですので、皆競って勉強したものです。黙学時間がすむと、あと一時間は自由な勉強時間でこの間は少々の私語は許されていました。

清潔整頓はいたってやかましく、着物はチャンとたたんで白布に包み棚の上にキッチンと並べておかねばなりません。夜具のたたみ方にして、少しでもゆがんでいたら上級生から注意されるほど厳格でした。

三度の食事に出される御飯は米の方が少ないくらいの麦飯で、おかずはきわめて粗末なものでした。いまのように栄養についてはあまり考えられておらず、ただ腹がふくれればそれでよい時代。肴は鯖一切れ、

それに時々は牛肉もつく程度、朝は必ず味噌汁一杯はついていました。しかし食事の時間が正しいのと朝の起床と夜の就寝時間が正しいことや運動、勉強を規則正しく行なっていましたので、師範生は皆ぶくぶく太って身体強健な者ばかりでした。生活を規則正しく保つことは、何よりの健康増進のもとということがわかります。御馳走とてもない寄宿舎生活のこのような実態が、そのことを如実に物語っています。

入学当初は二年、三年生の上級生が恐ろしく、食事のときにあまりたくさん食べたならにらまれはしないかとおそるおそる食事するので、いつも腹ペコでしょうがありません。そこで土曜日曜の外出日には、いの一番に飛び出して実家に帰り夢中で一週間分の食いだめをして寮に帰った記憶があります。それも二年生、三年生と進むにつれ遠慮なく食べるようになり、その頃は随分肥ったものです。おやつは毎週金曜日の午後渡っていました。それも色の黒い黒砂糖を混ぜたアンパンでした。これが私達師範生の一癖の楽しみで、そのほかの六日間はまだたく菓子に渡りませんでした。

寄宿舎生活の規則による運営はみな上級生がこれに当たっております。炊事についていえば、炊事長がいて炊事当番は材料の注意から煮炊き食後の食器の洗いかたづけまで分担します。この当番は室回しになっていました。室長は三年生がなっていました。舎監はせいぜい外出の帳簿の点検ぐらいで全部生徒の自治により一糸乱れずうまく運営されていたと思います。生徒は民主主義とか自治とかをやかましく申したてないで、自分達で静かに整然と規則を守り自治的自発的に管理してやっております。一人でも寄宿舎の規則を犯すものがあつたら、上級生が承知しません。夜会合して下級生を呼び出し訓戒したものでした。福岡師範には年頃の男女生徒が居ましたが、今のように男女共学でなく七歳にして男女席を同じくせずの孔子の教えに従い学習も別教室、寄宿舎ももちろん別世帯でしたので、男女の変な関係等聞いたことも見たこともなくそれはそれは清潔な生活ぶりでした。年齢でい

えば満十五歳から女子は三力年間、男子は四力年間でしたので今日の高等学校と少しも変わりません。十五歳から十八歳くらいの悪さざかりの者でも、教育薰陶のやり方一つではこのように立派に躰けられるものであります。

戦後日本の文化、文明はおそろしく進み、昔は歩いていたものが、現在では自動車、飛行機、汽車、電車等々、また都会の夜は昼を欺かばかり電気がついているのに、青少年の墮落ぶりはひどいもので毎日の新聞を賑わしている姿は見られたものではありません。これはいったいどこに原因するかをつきつめて見ますと、私は小学、中学校の大切な義務教育期間の徳育の不徹底と申したのであります。そしてその根本をつきつめると学芸大学という何とも知れない学校名のもとに再出発した教員養成機関のなまぬるさ、不徹底さのせいと思うのであります。誰がいつ頃から学芸大学などと命名したものか、なぜ教育者の養成機関ならば教育大学又は師範大学としなかったのか。

私の師範学校生徒時代でも、男性で師範学校に入るのを卑下し、本心は実業学校に入りたいのだが官費で学費が要らないだけの理由でいやながら師範に来た人の例を二、三聞いたことがあります。戦後はそのようなことでわざわざ学芸大学などと名前をつけたのでしょうか。

まず何よりも自分は立派な教師になって教育に専念し、教育者の使命の貴さを認識して全身全霊をあげて子女の教育に従事しなければ本当の教育は行なわれないのであります。特に小学校児童は、ほんとうに神の子で、まことに純真そのものです。立派な教師が熱意込めて私欲を離れて教育に当たれば子供の躰は自由自在、人形を作るより徹底的にやれるものであることは私の永年にわたる小学校教育の体験から証明されます。これと反対に、もし教師の人となりが間違っつて、日本の少年児童の教育に自分の国をけなし、中国やソ連を美化してこれにおもねるような態度で教育に当たつたらその結果はどうでしょう。小学

校時代に植えつけられた精神は、中学校、高等学校に入学してもなおるものではありません。中学校、高等学校でどんなに努力しても、やきついた、曲がった訓育、徳育の傷はなかなかありません。日本人としての正しい立派な人づくりはまず小学校教育の根本的改善が必要で、その第一歩は小学校の先生の養成機関である学芸大学をとりあげ、この学芸大学のあり方を国家として根本的に樹て直すことが先決問題と考えます。

小学校下級学年の間に、立派に日本国民の魂は植えつけられると考えます。しかし、これには今一つ現在の母親の再教育も並び行なわないと、どんなに学校で子供の徳育に力をつくしても、家庭に帰って母親が正しい教育や躾をしなかつたら、これはちょうど底の抜けた器に水を盛るようなものでいっこう効果は上がりません。小学校では母の会を作つて子供と同時に母親の教育もする。かくて現在の小学校男女児童が成長して大人となった時代にはまた、明治天皇の御代のように隆々たる日本が期待されると思います。

私は明治三十五年師範学校を卒業いたしました。その頃の小学校教師で俸給の多少や賞与金の多寡につき不平をいうような先生がいると、あの人は教育者の風上にも置けぬと言つてけいべつされたものです。もともと、その頃の教員の俸給は一般官吏や会社の従業員に比べるとかなり優遇されてはいましたが、教師自身は物質欲を離れ、生徒愛に燃えて教育に専念したものです。また、この頃師範学校に入学する者の家庭は、ある程度の財産持ちで生活には困らない程度の者が入学して来たようです。その点生活に追われていないことで、のん気に構えていたともいえます。

ここでふれておきたいのは、現在の制度では学芸大学卒業生以外に一般の公私立大学を卒業して中学、高等学校の教員になる人も多数にのぼっております。これらの人にはその大学卒業後、教育大学に研修科

みたいなものを置き、そこに入ってもらって半年か一年みっちり教育者としての人間陶冶と生徒の指導法や教授法を修得させ、試験のうえ採用するようにしたら、優れた教員が出来るのではないのでしょうか。とにかく現在のようないいありさまでは日本の将来が心配でなりません、これは私の取り越し苦労でしょうか。

試験の最中に非常ラッパ

私が福岡師範生徒時代で今だに忘れえない苦笑するような記憶が二つあります。

その一つは学期試験の真最中に、夜中の午前二時非常ラッパに叩き起こされて千代の松原まで駆け足行軍させられたことです。師範学校生徒は非常の場合に備え、服装一揃い身近に整頓しておくのが規則になっていきますので、当日もチャンと揃えて寝(やす)みました。

午前三時頃、突如聞えて来るラッパに「スワ、火災か」と、早速服装を整え前庭に出て見ると、あにはからんやこれから千代の松原まで駆け足行軍とのこと。私たちの頭のなかは、今日は化学の試験のある口。何とか一生懸命化学の公式を暗記して床についたのに、これには閉口いたしました。でも走らねば退学になるかも知れないので、格好だけはニコニコ顔で千代の松原まで往復駆け足、そして洗面、食事というわけです。ところが走ることだけでくたびれてしまって、せっかく一生懸命覚えていた公式はほとんど忘れてしまう始末。

いよいよ化学の試験の時間が来て、若い先生が問題用紙を配られます。そこでたまりかねて年長者の誰かが「今日は頭がボケてしまっていますから試験はこの次の時間に願います」と申し入れましたが「出来なければ白紙を出したまえ」との一言に取りつくしまもなく泣く泣く受験したことを憶えています。

この一事でも、昔の師範学校がいかにかきびしい訓練をしていたかがわかります。しかしよく考えてみると、大切な神の子を預かる重大な責任のある教育者を養成する機関ですから、これくらいきびしくして人づくりをしておかないと、人を感化させるだけの人物は出来ないはずです。しかも荒戸町から千代の松原の往復といえは三里(十二キロメートル)はありましょつか。今の学生は遠足とか行軍はまったく駄目。バス遠足、汽車旅行で歩くのはほんの僅か。足の訓練が足りません。歩くということは何よりも健康の基ですから、たとえ乗物はあってもなるべく歩くのが、特に小柄な日本人には必要ではないでしよつか。

いま一つの強い思い出は三年の後期、半年間付属小学校に教授法の実習に教生として出向いているときのことです。

私は付属の高等小学校三年の組に配属され外国地理の担当をさせられました。ある日地理の受持ちの訓導である釜瀬新平先生から私の地理の授業を参観いただき、批評を仰ぐことになりました。釜瀬先生は地理科のベテランの先生だったので。教材は印度の物産と、印度の首府その他の都市についてであります。

そこで教壇に立つ十日も前から教案を練り印度の人口から物産、都市のこと全部頭に入れてこれなら大丈夫と考えていよいよ先生の参観を仰ぎました。黒板に大きな印度の地図を掛けて地図を指す一間(約一・八メートル)もあるような長い竿を持って教壇に立ちました。ところがどこからどう間違ったのか、教壇に上がると同時に、今まで立派に覚えていたはずの印度の地理はまったく忘れてしまい人口とか物産など一つとして出て来ません。

私は泣くに泣かれずほうほうの体で、長い竿を持って教壇の上を右往左往するばかりだったそうです。自分は夢中ですからどんな格好をしていたかよく覚えていないわけです。冷汗をかきながらやっと授業を

終り、とにかく実地授業を参観していただいたのですから釜瀬先生の御批評を願いましたところ、先生曰く「今日の授業は弁慶が長いなぎなたを持ってうろうろしているのにそっくり」と唯一言。あとは何も申されません。私は口惜しくてなりませんでした。

最初はこんな失敗もありましたが経験を積むにつれて生徒の扱いもうまくなり、ときには面白いこともいつて生徒を喜ばせるようなゆとりも出て来ました。たしか実地授業の点数は九十点は貰ったと思います。しかし、半年間も付属小学校の実地授業にたずさわるのは容易ではありません。毎日毎日勤務の状況を批評され、この実地授業の成績が良くないと絶対に卒業させてくれません。我ながらよく頑張ったもので、優秀な模範訓導からみっちり仕込まれて段々先生らしくなり、半年間の教生生活を終えて無事卒業いたしました。

最初は便所掃除を教える

明治三十五年三月二十五日、福岡県立師範学校を卒業し、その翌月四月十日付けで福岡県鞍手郡直方高等小学校訓導を拝命しました。

だいたいが師範学校卒業の訓導が少いのには、田川、嘉穂、鞍手方面には師範卒の先生の配置がほとんどないくらいで、まともな正訓導は少なく、雇いとか検定試験に合格しただけの先生が大部分でした。師範卒の女子訓導で直方高等小学校に配属されたのは、私と田中やすさんとの二人だったのです。ほかに田川郡後藤寺小学校に清松さんという方が赴任されましたが、これが師範卒の女子正訓導配置の始まりと聞いております。私は当時やっと十九歳(数え年)になったばかりで世間のことはよくわからず、ただ県学務課の指令のままに赴任したものです。

ところが、この頃の直方は炭坑の一番景気のよい時代。日清戦争は勝

利のうちを終って日本の興隆とともに産業は起こり、船でも汽車でもみな石炭を使っているものですから、いくら掘っても足りないくらい石炭は売れました。

直方でも貝島太助氏一家の豪勢振りは、まるで昔の一国の殿様扱いでした。

私は直方町の資産家で質屋を営んでおられた山本さんの離れを借り、そこに下宿住まいすることにいたしました。当時の私の初任級は月俸十二円です。その頃米一俵(六十キロ)が五円でした。

直方の町そのものは活気にあふれ、新興の勢いに燃えていましたが、炭坑地だけあって何となく荒っぽいところがあり、私が一番困ったのは生徒が使う便所の不潔なことです。直方高等小学校は男女別々の組分けで、男子は男らしく女子は女らしく優しくする教育が施され、私は三年の女子組の担任になりました。ところが、男子、女子便所とも掃除の不行届きと使い方が悪いので足の踏み場もないほど汚れていました。そこで、私は考えて炭坑地の教育はまず清潔整頓から手を着けねばいけないとし、担任の三年の生徒にまず便所をきれいにしようではないかと提唱、私自身が先頭になって全校生徒の便所の洗い掃除をし、きれいに拭きあげました。休み時間になると、私の組の生徒を手分けして一々便所の使い方の見張りに立たせ、汚した生徒には後始末をさせました。今考えると、たった十九歳で思いきったことをしたものと自分で感心しています。

若い頃は音楽が好きで、特に筑前琵琶に凝ったものです。当時、貝島炭坑の大工さんをしていた石村旭光先生に学校の休みのときよく教わったものです。最初は歌詞調の「龍田の紅葉、野田の藤……………」などの簡単なものから段々程度の高いものまで習得して、特に「太田道灌」の曲は私のもっともおハコとするところでした。

郡視学の川島瀧明先生はよく私を婦人会の研修会につれて行っては琵琶を語らせ、私も調子に乗って「そもそも太田道灌と申しけるは………」というような工合でやったものです。

川島先生の奥様や、ときの直方高等小学校の名校長といわれた有吉先生の御宅にも時々行って琵琶の指導をしました。

琵琶といえば、当時は随分流行したもので、私の実弟関次郎は特に名人で、語る方よりも奏でる方が素晴らしかったものです。なかでも明智の近江の湖水渡り」の琵琶の演奏は、聞きほれるほどでした。

直方高等小学校に赴任したての新米訓導の私を、どうやら一人前の教師として育てて下さったのは小畑伸校長先生でした。この先生は実に穏健な方で、職員を愛の精神で指導なさり、まさに円熟された人柄の方です。私もこのような校長先生に仕えて指導を受けることを心から感謝いたしておりました。しかし、この学校の職員はさすがに炭坑地のことなので、気が荒く、たびたび校長先生と論争をし、ときにはつかみかかって校長先生をひどい目にあわせることもありました。十九歳の若い教員の私は、師範学校時代真面目で誠実に自分の職務を尽くせとだけ訓練されていて、炭坑地の気の荒い職員の内状などわかるはずもありません。あんな立派な校長を、こんなにまでしていたためつけなくてもよさそうなものをと同情はしても、手は出せずただオロオロするばかりでした。

その後、小畑先生は門司市の視学として栄転され、後任には有吉邦蔵先生が校長として赴任して来られました。この方は人格といい、実力といい、福岡県随一のやり手とされ、まだ年も若うございました。このような校長先生が来られては、職員の方も手も足も出ません。学校内は静かになり、職員もみんなそれぞれの仕事に励むようになりまし

た。どういうものか、私はこの有吉校長先生にも可愛がられました。

私は高等小学校三年生の組担任から四年生へと持ち上がり、各教科の授業はもちろん体操もやっていました。特に音楽の授業が得意で、高等小学校の生徒三組を合併にして男生徒に唱歌の指導をしたものです。炭坑地の荒っぽい男子組三組も一緒にして二階の講堂に入れ、年若い十九歳か二十歳の女教師でよく指導したものと我ながら感心しています。これは、やはり師範学校時代厳しく教育されていたことの顕われだと思われます。十九歳、二十歳は数え年ですから、今でいえば高等学校三年生と同じ年頃です。

県庁から視学が来校されるとどういいうわけか、有吉校長先生はいつも私の学級を自慢して参観させておられました。また川島視学が視察に来られても同様で、不思議に私は郡視学や校長から可愛がられる性質でした。したがって私も得意で、毎日気持ちよく働くほかに何の欲もなかったように思います。この頃の私たちは、特に待遇のことなど少しも考えたことはありません。ただただ立派な教員になり、少しでも生徒に喜んでもらうことが楽しみでしたし、そのように心掛けたものです。

月給は、一年半に一度くらいの割で昇給いたしております。初任給が先に述べましたとおり女教員で十二円。それから一年半たって一円増俸で十三円、三年経って十四円です。十四円くらいでは家庭に仕送りする余裕はありません。下宿料を差し引くと二、三円くらい残るのですが、一、二円家庭に送っても着物を作るときにまた加勢してもらわねばなりませんので同じことです。

とくに若い女が炭坑地の直方に永く勤めるのもどんなもんだらうということになり、家庭の方からのすすめもあって、直方高等小学校に三年五カ月勤めて草ヶ江高等小学校に転任することになりました。

結婚の申込みを断わる

私が直方高等小学校に赴任して間もない頃のことです。当時私の実家は西新町にありまして、近くに東山という小高い山がありました。ここで、広島県人でながいことアメリカのロサンゼルスで働き相当の金を貯えて内地に帰って来た石田豊次郎という方が、炭坑事業を思い立ったのです。この方はまだ独身でありましたし、炭坑事業を始めることで父ともいろいろ接触があったようです。私が師範学校卒という関係で嫁にと申し込まれ、相談を受けたことがあります。ところが、師範学校は官費制ですからどうしても二年間は教員として勤めあげねばならぬことになっていました。私もよい縁だなと一度は考えたのですが、結局は潔よく断わることにしました。

私のような不きりょうの女でも、若いときには貰ってくれるような人があつたのかなと今考えておかしくてなりません。

縁談は、これが最初で最後だったことになります。

培った教員魂

明治三十八年九月十二日付けで草ヶ江高等小学校訓導拝命、俸給は月十五円です。

その頃の草ヶ江高等小学校は直方とは違い、生徒の家庭は良し、父兄の教育程度も高い県下の優良校で、福岡師範学校の教生がよく見学に来ていました。この学校に赴任してからは、学校には、実家から通勤できるようになり、父も安心したようです。校長は広田波毅先生で、温厚な優しい人でした。

間もなく福岡師範が男子師範と女子師範に分離されることになり、このとき女子師範は鳥飼の方に新しく校舎を建てて移ったのであります。私はどうしたわけか、両校分離の年、すなわち明治四十年三月十四日付けで男子師範の方、福岡県師範学校付属小学校の訓導を拝命しました。この小学校で、師範生徒の教生の指導にも当たることになったのです。卒業直前の師範生に教授法の実地指導をする役目なのです。

明治三十五、六年から四十五年頃までは、福岡師範の黄金時代といってよいでしょう。それに伴って付属小学校の方の教員陣容も多士済々で、若年の私を除いては主事以下堂々たる顔ぶれでございました。主事には最初森脇先生が座っておられました。この方がやめられたあとと広島高等師範学校の先生をされていた中川直亮先生が着任されました。年は三十五、六歳位でしたでしょうか、若くて頭脳は明晰、学識豊かで非常に明るい方でございました。これに配する各訓導もまた、若くて優れた方ばかり。首席訓導が北原先生、続いて立石仙六先生、山川敬行先生、織田信雄先生、木村哲郎先生、清水甚五先生等々。女子の訓導は、最初は山根ソマ先生と私の二人でしたが、途中で山根先生が退職されて私一人になりました。当時は男子師範学校を本校、付属小学校はもちろん付属と称していましたが、その本校の教諭は当然男子ばかり。付属の方に女訓導として私一人。しかも年齢わずか二十歳ですから、肩身せまく心細いものでした。このような優れた先生方の中に入れられて第一に感じたことは、自分の未熟さ、とりわけ教育に関する学識の不足、技術の劣ることであります。ここで私も大いに奮起いたしました。そして「よし、女性なりとも大いに勉強して男子訓導以上の力を持つようになってみせるぞ」と、朝は必ず五時には起き、登校前二時間は教育に関する書物を勉強いたしました。夜はたいいてい十二時か午前一時までの勉強です。このようにして教育に関する書物をほとんど読みつくし、各教科の指導書、参考書などすべて目をとおして自信を持ち、教生の指導に当たられるよう若い意気で頑張ったものです。

私がおのの後の生き方として一つのことに取り組んだら徹底的に追究する習慣　というより、性格を備えたとすれば、この青春の時代すなわち付属小学校時代のはげしい研究修業で培われたといえます。

この頃の付属小学校は県下小学校教育の指導機関であるばかりでなく、全国でも指折りの名声を博していたのであります。よくいわれておりましたが、東は長野県、西は福岡県が小学校教育がもつとも進んでいたのです。

長野県と福岡県はお互いに競い合い、福岡県では長野県の研究成果を取り入れるように試み、一方長野県の方ではこれまた福岡県の優秀な先生を招待して初等教育研究の状況を学ぶなどなかなか活発なものでした。そのほか、鹿児島県など他の県からもよく招請されていました。

このように、当時の福岡県が教育県として、特に初等教育の分野で全国的に名声を馳せたのは、その頃の県下小学校教員が一つの教員魂とでもいえるものを持っていたからと思います。そしてこの教員魂はどこで培われたかといえば、優れた先生方が揃っていた師範学校で、しかも全寮制度のもと徹底した訓練によるものと確信いたします。

これは私の年来の主張ですが、小学校、中学校の教師たらんとする者は、人間のもつとも大切な時期の魂を創るのですから、何とも知れなような学芸大学とかいわないで教育大学、あるいは師範大学で結構、そして必ず全寮制度にして厳しい訓練を施す。その代りに学費、生活費は一切国の支給とし、教員の俸給も一般会社より数段上にするくらいの思い切った政策が必要と思います。

このように男子師範付属小学校訓導を足かけ四年間勤めました。以前から好きだった琵琶も、この間はプツツリ止めて昼も夜も仕事、研究、

読書の連続で、とにかく教育の道一筋に専念したのであります。このときの努力が、その後の私の一生を大きく左右したと思います。

弟、関次郎病いに倒れる

人間のしあわせというものは、そうそうながく続くものではありません。私の楽しい教員生活の中で、思いがけない事件が起こったのです。それは、私が一番可愛がっていた実弟の関次郎が肺結核に倒れたことであります。

弟の関次郎は尋常小学校、高等小学校とも常に首席を占める成績だったことは、既に前に述べたとおりであります。高等小学校卒業後、中学修猷館に進み、ここでも常に学業は優秀でございました。また、特に剣道にすぐれ、その頃武藤先生といわれる剣道の先生がいらっしやいました。が、その方の愛弟子で体格もガッチリしていたのであります。修猷館卒業後、海の男を志して東京の越中島にあった東京高等商船学校航海科に入学いたしました。この年、修猷館から四名がこの学校に入学していますが、弟は成績が優秀とかで横浜郵船会社の特待生となり、学費はその方で負担してくれていました。

ところが、忘れもしません明治四十二年十二月二十四日、商船学校の忘年会で得意の筑前琵琶を奏でている最中に突然喀血し、学校でも大騒ぎになり、私宅にもその旨電報が入りました。

家では関次郎が休暇で帰省して来るのを一日千秋の想いで待ちわびている最中のことだったので、父は気落ちしてとうとう寝込んでしまいました。

私は若くはあるし、汽車の旅にも馴れていましたので、早速付属の主事小川先生の許可を受けて独りで越中島まで病人を引取りに出かけま

した。病気も小康を得、少しおさまったとこのことで先生方の助けをかりて帰省の用意を整えました。汽車も一等車に乗せ、寝(やす)んだまま、沢山の同窓生の見送りの中を東京駅発。私が看護人として、一緒に自宅に帰って来たのです。

これからが、私の苦勞の始まりであります。

私ども、兄弟姉妹は幼い頃母を失ない、その後、父は後妻をめぐりませんでした。家事の方は私どもの手を煩わしたり、親類や近所の人、または女中を傭ったりして何とかしのいで来ていましたが、母の死後十年、父はやつと後妻を入れ、その頃私どもには、異母弟妹になる子供が三人出来ておりました。明治時代の肺結核といえ、現在と違ってもっとも金がかかり、しかもほとんど不治と見なされていたような業病^二です。家には小さい子が三人いましたし、うつりはしなかつた心配があり、義理の母に対する遠慮もあって、弟としても随分悩んでいたことと思います。私が学校から帰って来ると、いつもしょんぼりした青い顔で縁側に座っていました。家の中は暗くなるし、弟が可哀想で矢も楯もたまらぬ気持ちに追いこまれました。このままでは、とても弟の病気は癒りはしない。せつかく優秀な才能を持っている弟をもう一度再起させるには、思いきって転地療養をさせた方がよいと考えつきました。

弟を元気にしてやりたい一念でした。長姉のタミは、このとき既に坂家に嫁していましたが幸い近くに居りましたので、父と姉と私と三人で相談し、私が月給の大部分をはたいて弟の治療費の面倒を見ようということになったのです。このような段取りをつけたのは、私が田隈小学校に転勤して二年目のことです。このときからながいこと弟の回復を祈りながら、私はその収入の大部分をつぎこんでゆく運命になったのでした。

生徒の連れ出しに家庭訪問

明治四十三年六月二十日付けで、私は付属小学校訓導から早良郡田隈小学校訓導に転任になりました。普通の常識からすれば、付属小学校の訓導から田舎の小学校の訓導に転任するのは都落ちの格下げと考えられます。私が心を動かしたのは新設校であること、農村の小学校の経験を味わいたいことと、もう一つは付属小学校訓導の田丸三次郎先生が校長になられるのもう一人付属小学校から先生をつけてやらねばうまく行くまい、ぜひにという熱意にほだされてのことでした。したがって、私もむしろ自分から進んで転任することにしたわけです。二十六歳の血気ざかりでした。

ところが赴任してみて、びっくり仰天いたしました。付属小学校では生徒の服装は立派で家庭もよし、よく勉強する者ばかりです。大抵の覚悟はしていたつもりですが、頭で考えたことと実際は大違い。服装の悪いのは当時の農村ですからまあまあとして、農繁期には赤ちゃんを背負って学校に出て来る始末。出席率も非常に悪く、授業の始まる前に一々家庭訪問して生徒を連れ出して来るのも再々でした。また勉強することにまったく関心を持たない子供がクラスのうちに七、八人いましたので、これらの生徒のために廊下に一教室づくり特別指導をするなど、今まで知らなかった苦勞をしたものです。しかし、校長の田丸先生が先頭に立って教育者として一生懸命頑張っておられるものですから、私も先生の片腕のつもりで大いに成績を上げねばと学芸会を特別にとりあげて大々的に催したり、村の女子青年団を氏神様に集めて作法の稽古をしたり村全体の教育にまで手を広げました。五十数年たった今日でも、その頃の教え子が中村先生、中村先生と慕って時々訪ねて来てくれます。皆それぞれ一人前になっていますが、昔の鼻たれ小僧時代のことを思い出し、懐しくてなりません。これが教師冥利というものでしょうか。

この田隈小学校の教員時代も以前と同様、睡眠時間はせいぜい四時間か五時間ぐらいで、月給の上がることなどは毛頭頭になく、ただ働くだけでした。

一方、弟関次郎には私の月給の大部分を治療費として送らねばならぬ境遇で、まさに内外ともに多事多難の苦難を味わいました。これが天から授かった自分の運命と諦めて、月給が渡されると喜んでそのうちの二、三円を自分の手許に残し、あとは全部弟の療養先に送金したものです。

有田高小を進学校に

こうして田隈小学校に勤務すること四年半、大正三年一月今度は早良郡有田高等小学校に転任になりました。俸給は二十二円で、この額は当時三十歳ぐらいの平訓導としては破格の高給だったそうです。そのかわり、高等小学校で女子一年生、二年生合同の複式学級七十二名をひとりで担当し、国語、数学、理科、地理、歴史、図画、習字、おまけに体操まで全教科を一人で教えねばなりませんでした。

この有田高等小学校に赴任するとき、ときの郡視学浦江先生から特に私に注文がつけられたのであります。それは「実は早良郡に高等小学校が三校ある。西新校と草ヶ江校と有田校と。草ヶ江校はサラリーマン家庭の子供が多く教育程度も高い。男子は修猷館、女子は県立福岡高女によく合格して入学率もよい。ところが、有田校の方は農家の子弟が主であり勉強もせず、入学試験を受けてもさっぱり合格しないので弱っている。あなたが有田校へ赴任したら、入学試験にもほとんどん合格者を出すように努力してくれ」とのことでした。

その頃の有田高等小学校は高小だけの独立の学校で、教員組織もい

たつて小じんまりしたものでした。校長は福田丑之助先生で、地元の生まれ。暮がいたつてお好きな方で、村会議員さんとよく暮盤を囲んでおられました。まことにゆつたりとした好人物でした。教頭は井上忍先生で羽根戸の地主さん。のびのびとした明朗な方。そのほかに、訓導の先生が四人と、別に裁縫に若い女の先生が一人。まったく家族的なふんいきでお互い気心はわかつておるし、思う存分のことか実行できる有難い職場でした。

この有田高等小学校の教育における想い出を二、三述べてみましょう。

その一は、前にも述べた一、二年の複式学級のやり方です。これは一年生が理科の時間は、二年生は習字。二年生が国語の時間は、一年生は図画という風に、どちらかは自習ができるように組み合わせ、二年一人の先生で授業を進めて行くわけです。ただ体操と音楽だけは教室の関係でそもゆきませんので、これだけは、一、二年合併で同じ材料で指導していました。

その二は、秋の公開運動会のことです。この運動会のために、四月には既に計画を樹てました。歩調練習と飛箱、中飛びなど運動場に平素から設備しておき、生徒は朝掃除が済むとおしやべりをしないで早速運動場でそれぞれの練習をします。秋の本運動会ときは生徒がこのように興味を持って自分から進んで鍛えた技を公開するのですから美事なもので、私が号令一つかけると一糸乱れず歩調をとつて七十二人の生徒が行進するさまは団体行動の極致といつても過言ではないくらいでした。体操にしる、飛箱にしる、中飛びにしる、自由自在にできるものですから、見物席の父兄や一般有志の方々からまるで女の幼年学校（軍人養成の学校で士官学校に入る少年を教育する学校）のようだと評されたものです。

生徒は教師の熱心と適切な計画さえあればどのようにも育ってくれる

もので、私のように足の悪い女教師でも専門の体操の先生がはだしになるくらいやればやれるものとの自信をつけました。このように成績の上があったときの満足感はとても金に替えがたいものがあるので、これが本当の教育者の喜びではないでしょうか。

その三は、中学校に進学する生徒の補習授業のことであります。その頃は、男は修猷館、女は県立福岡高等女学校を希望する生徒が大部分であります。私は赴任のとき、すでに郡視学の浦江先生から言い渡されてきていることでもあり、意地でも修猷館や県立高女にパスさせて見せねばと決心いたしました。とにかく教師の熱意と努力さえあればできないはずはないと気負い込み、結局それでいつの間にか補習授業は全部私が背負い込むような形になってしまいました。

私はこのとき、補習授業を一般補習と特別補習の二段階に分けて実施しました。

まず一般補習について述べますと、これは放課後掃除が済むと進学希望者全員を集めて学校の教室で補習授業を始めます。時間割は

第一回目補習、午後三時・六時

夕食(持参の弁当)休憩

第二回目補習、午後七時・九時

一般の補習を受ける生徒はこれで終り、もうそのころは暗くなっているので提灯をとぼして家路につくというありさまです。

男女合同の補習クラスで、科目は主として数学、国語の二科目で特に数学に重点をおいて授業しました。私は数学が得意な教科でしたからいろいろと研究し、高等小学校の数学を種類別に分類して手の混んだ問題は図解するやら特別の解説を加えて指導したものですから、難か

しい問題でもよく解けるようになりました。計算問題などは浴びせかけるように宿題を課して自習させ、よく出来た場合はほめるものですから皆ほとんど成績が上がり、大体県立中学や県立高女にうかる程度に力もつきました。

特別補習の方は、生徒の父兄から特別の依頼を受けてそれ以上の補習をすることです。そのころ男生徒四名、女生徒四名くらいだったと思いますが、これらの生徒を私の下宿先の家有田村のさるお寺に二間借りてそこに泊らせ、夜学のまた夜学を強行してどうでもこうでも合格できるまで鍛い上げるやり方です。

この特別に預っている男女八人の生徒は、学校の一般補習が終るとみんな宿であるお寺に引き揚げ、それからまた勉強に入ります。たいいてい夜中の十二時頃までやりましたが、どうかすると朝方鶏の鳴き声を聞き、うろたえて床につかせたこともありました。

このように激しい補習をいたしました。誰一人不平を言つ者もなく、また父兄の方も預けた以上は私に一任で、その結果県立中学にも全員合格する好成绩をおさめました。かくして草ヶ江校との格差もなくなり、有田校は一躍有名になったのであります。

以上のように、補習時間は毎日一般補習生で五時間、私の下宿先に泊っている特別補習生は七時間と激しいものでしたが、校長は当たり前と考えるおられて特別の手当もなし月給二十四円、それだけでございました。

父兄の方も昔のこととて呑気なもので、教師に謝礼など考えているようすもなく、私自身も謝礼や手当て目当てにやっているのでもありませんでした。浦江先生の期待の言葉に励まされ、教師としての意地からやっていることですから、生徒がみんな受験に合格さえしてくればそれでよかったです。三十歳から三十五、六歳の働き盛りのころとはいえ、自分ながらよく頑張ったものだと思っています。

この補習について、今一つ思い出話があります。ある冬の夜のことです。風が強く、雪は降るし、まことに寒い日でした。張りきっている私はその日も平常通り夜の補習を行なうと申し渡したところ、三、四人の男生徒が「先生、今晚は特別寒いので補習はやめにして帰らせてください」とのこと。私はムツとしましたので「よろしい。帰ってもよい。そのかわり修猷館に入学出来なくとも私は責任は負いませんよ」とつっぱねました。そのため、生徒たちは帰ることをやめて、元氣よく夜七時からの補習にも参加しました。

ところが数学の解説の真つ最中、黒い覆面頭巾をかぶった男が廊下から声をかけるので、いまごろ誰だろうと外に出て見てびっくりしました。視学の浦江先生の巡視だったのです。宿直の男の先生は、寒いためか、早く床に入ってやすんでおられたので黙って入って来たのととでした。

浦江先生は頭巾をぬぎながら「今日、原小学校の青年学級を視察に行ったら、寒いので皆勉強は中止して火にあたっておしゃべりしていた。今から壱岐小学校の青年団を視察に行くところだが、その途中立寄ってみたのです。有田高小の生徒はなかなか元氣者ばかりじゃ。これでは県立中学に合格することうけあい。しっかり頑張り給え」と激励されて去られました。私も心中大いに感激するし、生徒の勉強も一段と熱が入ったようでした。

補習授業も一々手当てを貰わねばやらないという小遣錢とりのやり方では、実力はつかないと思います。補習を担当した以上、責任をもつて是が非でも合格させてみせる。また合格させねば教師たるものの面目丸つぶれという意地と情熱が大切で、生徒愛よりほとばしる熱意が最後の栄冠を得るものだとな私の体験からいえます。

私は個人的には弟の療養費を買いでやらねばならず、当時の俸給二十四円のうちから二十二円五十銭を割き、私の手許にはわずか一円五十銭しか残りません。このころの二十四円は、女教員としては最高俸で、事情を知らない人は中村先生はさぞ貯金も多いことだろうと聞いてたそうです。

教員の待遇激変

大正九年一月十六日付けで、私は福岡県三井郡松崎実業女学校教諭に転任を命ぜられ、家庭科主任として赴任いたしました。

この松崎実業女学校の校長先生は私の師範学校時代の同窓生山田かめさんの厳父だった関係で、ここでも可愛がられ、幸せな教員生活を送ることができました。

このころのことで特に強く記憶に残っていることは、教員の待遇の激変であります。

大正三年に勃発した第一次世界大戦の影響で日本は好景気となり、ドルはどんどん流れ込み、会社、銀行等の好況は目ざましいものがありました。それにつれて、会社員、銀行員の給料もずんずん上がり、物価もこれに劣らず上がるといふありさま。ところが、ここで一番困るのが月給の少ない小学校の教員です。

しかし、このころの教員は厳格な師範学校教育を受けているし、第一教師たる者が俸給の多寡を云々するとは教育者の風上にも置けぬと考えていた時代、つまり武士は喰わねど高楊子式の風潮の強い時代ですから、誰一人待遇云々という人もなく、ただ我慢して黙々と懸命に生徒のため、愛の教育に専念いたしておりました。

しかし、世の中はめくればかりではありません。政府当局ならびに一般の世論も、学校の先生方の待遇を改善せねばということになり、大正七年ごろから九年ごろにかけて先生方の増俸が急ぎ実施されるようになりました。小学校、中学校の教員に年功加俸の制度が出来たのもこのときからと思います。私の手もとにある当時の辞令を拾って見ますと、次のようになります。

一、大正七年五月二十二日有田高等小学校訓導中村ハル

自今月俸二十九円

一、大正七年九月三十日有田高等小学校訓導中村ハル

自今年功加俸年額四十八円

一、大正九年十月一日松崎実業女学校教諭中村ハル

自今年功加俸年額六十円

一、大正九年十二月十五日松崎実業女学校教諭中村ハル

自今月俸八十二円

一、大正九年十二月十六日松崎実業女学校教諭中村ハル

自今年功加俸年額百八円

第二部料理研究に燃やす執念

弟、関次郎の死に誓う

明治四十二年十二月に弟関次郎が発病したことはさきに述べたとおりですが、家庭の都合と本人の希望で、その後、転地療養を続けさせました。療養先も、末弟専吉が住んでいた糸島郡波多江にしたり、あるいは、深江の方に移したりしました。もちろん、この間の療養費は私の負担でまかないました。ときには遠く別府の温泉治療にやるなど、とにかく本人の気の向くままにさせたのであります。

このころのことを、弟が私淑していた友人の安川第五郎先生が覚えて

おられて、後日話ですが「関ちゃん」が別府の帰りに戸畑の自分のところに寄って、筑前琵琶を弾いて聞かせてくれたのが未だに耳に残っている」といわれたことがあります。発病して九年目ごろにはほとんど病気もなおり、身体の調子もよくなったのであります。

そこで、弟としては、沖縄の未開地に行つて一事業を起こし、姉や私、そして末弟、父親に世話になつた恩返しをせねばと、心に決めたのでありましょう。急に、沖縄に行きたいといい出したものです。私たちも氣候が暖かく、それに土地を変えるのもかえつて良いのではないだろうかと考えて同意いたしました。しかし、あとになつて判つたことですが、これが大失敗だったので。炎熱焼くが如き沖縄の氣候は、肺結核にはかえつて悪く、十年間も苦心して養生させたのがすべて水泡に歸し、再度病気が悪化したのであります。沖縄から電報が入つたときは、すでに病勢も極度に悪くなり、遂に大正十年四月、はるか遠く僻地の沖縄で不歸の客となつたのであります。十二年間、ただただ弟の恢復だけを祈り、青春を捧げてきた私です。気持ちの張りを一度に断たれ、自分を失い、何度か死場所を考えたこともありました。しかし、いやいや、ここで自分が死んだりしてはいよいよ一人の父に迷惑をかけると思ひ直しました。

いくら悔んでも、死んだ弟は歸つて来るものではありません。また弟のためには十二分のことをしたつもりですし、これも運命と諦めて、強く生きる道を選ぼうと決心いたしました。

弟は私が転地療養先に療養費を持って、時たま訪れると、いつも涙を流して押し頂き、帰りには私の後姿を手を合わせて拝んでいたそうです。沖縄の地で病態が悪化し、死期が近まつてから私に送つた手紙の中に

「病床について十数年のながい間、母代りとして姉さんに本当に御世話

になりました。この大恩は、たとえ死んでも忘れることはできません。不幸にして、私は先立つことになりましたが、靈魂不滅を信じています。私の靈魂は必ず残って姉さんの生涯を守り抜き、せめてもの御恩報じをいたします」

と、いい残したのであります。このことも私を大いに力づけてくれました。

このころ、私は松崎実業女学校家庭科教諭をいたしておりましたが、本来が家庭科専門の道は通ってきていませんし、田舎の方にくすぶることとも気が進みません。弟も遂に亡くなって、その点は身軽くなったといえます。年齢は既に三十六歳、いまさら結婚しても後妻におさまるのが関の山と考え、ここに生涯を教育の道に捧げる決心を新たにしました。

中央へ出る

松崎実業女学校には家庭科主任の教諭として迎えられたのですが、私の教員としての過去の経歴は、家庭科専門ではありません。何とかこの方面の勉強をせねばと、かねがね思ってはいました。田舎に引込んでいては、それも思うに任せない状態です。東京方面に出たいと思っていた矢先に、弟の死が一つの転機を作ってくれたのでした。一生を教育の道に捧げ、ひとつ優れた家庭科の教員たらんと志を立てました。

ちようどそのころ、横浜市の教育課長が福岡師範卒業の児崎為槌先生で、その視学が私の付属小学校訓導時代に主事をしておられた中川直亮先生。おまけに横浜市の新設校岡野尋常高等小学校長には、元福岡師範付属小学校の訓導で、私が師範生時代教わった久芳龍造先生がいられるということを知りました。早速、中川直亮先生に事の委細と

中央に出て勉強したい気持ちを書いて送りました。付属小学校訓導時代の私の努力や働き振りをよく御存じの中川先生は非常に喜ばれて、すぐにも横浜市岡野尋常高等小学校訓導に採用したい旨の返事を寄越されたのであります。私も、こんな好都合なことはまたとない。これも亡くなった弟の霊の引き合わせかと喜び、松崎実業女学校長山田先生の許しを得て、単身神奈川県の方に赴任することにいたしました。

もちろん、父親や姉の保坂タミともよく相談してのことでしたが、このとき姉がいつてくれました。「どうせ結婚など考えないで、好きな教育の道に一生を捧げる決心をしたのだから、それはそれで一つ頑張つてごらんなさい。その代りに、老後のかかり子として、私の四男久雄が少し利口そうだから、これを将来養子にやりましょう。これで、私も後顧の憂いなく働かれるようになりました。このときの久雄君(当時四歳)が後日、私が私学の設立、経営に乗り出すようになったとき、事務局長として大いに私を助けてくれたのであります。

岡野校の”中村式移動水流し”

大正十年四月十六日付けで神奈川県へ出向の辞令を下付されました。月俸は一足飛びに九十円に上がりましたが、このころ小学校女教員でこれだけの高給取りは横浜市には私以外一人もいませんでした。田舎の福岡県から赴任早々最高の待遇を受けたわけですから、私自身も大いに感激し、責任を感じずにはいられません。大いに活躍して、福岡師範卒業生の名をけがさぬよう心に誓ったものです。

ところで岡野小学校の高等小学校の方の家庭科を担当したのですが、料理を教えようにも何一つ調理の設備はなし、困り果ててしまいました。設備がないからといってほづっておくわけにも参らず、ここで中村式移動水流しという面白い設備を工夫考案しました。校長の久芳先生に相談すると、それくらいの費用は出そうとのことでした。安心して

この移動式水流しというのは、調理をするときに一番大切な流しを移動式にし、足にピアノの車をつけて棚も作りつけ、上の段には洗った器具が置かれるようにし、また杓子などは吊られるように釣り金具をつけました。下の段にはスリ鉢やザル、砥石などを置くようにしました。流しそのものはトタンで内張りし、鍋や釜、茶碗などが洗われるようにしました。給水、排水にはすべてゴム製のホースをそれぞれ一本宛つけて、排水用のゴムホースは長目にして教室の外の庭に流されるよう考えました。給水用のゴムホースは直接水道管につながるようにしたのです。

この移動式水流しは平素廊下において、いざ料理の時間になると教室の中央に移動させ、そのまわりに生徒用机二個を突き合わせて一台の実習台にし、これをズラツと並べて実習室に早変りさせる仕組みであります。

実習のときに机が傷まないよう水はじきの良いカバーで机の天板を覆い、その上に俎(まな板)や庖丁、その他の道具を置いて実習にかかるように考えました。ところが庖丁が一本もないのです。このころの東京、横浜ですら、高等小学校の家庭科では理論だけで、掃除の仕方や料理にしても、正式に実習などはなく、従って俎もなければ庖丁もないのが実状でした。

私の考えでは、家庭科のあり方として理論を説き、科学的な掃除の仕方や看護、衛生、調理の知識を持たせるのももちろん大切だけれど、それだけでは不充分で、更に一歩進めて、これらの実習をおおして、技術を体得させ、実習を通じて人創りをすすめるべきだとしていました。庖丁一本、俎一枚なしでは実習どころではありません。

そこで、当時教育界一流の校長といわれた久芳龍造先生に、このみじ

めな実状をじかに観ていただき、大いに応援してもらって、せめて俎と庖丁くらいは必要数揃えてもらいたいとの一念から、校長先生に、私が実地授業をやりますからは是非参観願いたいと申し出ました。熱心な久芳先生は大いに喜ばれ、期待されて、いよいよその当日になったのです。

このときの模様がなかなか傑作でした。教室と言っても、普通教室の中央に、私の考案になる移動式水流し台を据え、排水、給水ができるようにホースをつないであります。実習台は生徒机二個で、一台のにわか造り。その上にカバーをかぶせ、俎がないので代りに厚手のボール紙をまな板の大きさに切って据えてあるというぐあい。庖丁は家庭から菜切庖丁を持って来ている者も居るし、都合のつかない者は止むなくナイフで間に合わせる者もいるといったありさまでした。さて、いよいよ大根や菜葉の切り方練習から始まりました。ところが、本式の俎でなくボール紙の上で切るものですから思うように切り刻まれません。なかには、もしや机に傷がついてはと、時々ボール紙俎を持ち上げては下をのぞき込む者もいる始末。

三十分間くらいは久芳先生も喜んで参観されておられましたが、このチグハグな実習風景に嫌気がさされたのか、授業の途中でさっさと引揚げて行かれました。私は、これは授業がまずかったのかなと心配でなりません。やがて、授業を終えて、早速久芳先生のところへ授業の批評をうかがいに行きました。ところが、先生は顔を真赤にし頭をおさえていらっしやいます。

「どうも中村さんすまなかつた。僕は男だもんで、家庭科の実習についての考えが足らなかつた。なるほど調理の実習には俎も要るし、庖丁も要る。あなたが考案した流し台と俎と庖丁、鍋、釜、コンロなどは、これら実習に欠かせない基礎の道具で、これらが揃ってないことには実習ができないことを、マザマザと見せつけられました。実は恥かし

くなつて、あの場に居たたまれず、ほうほうの体で逃げて来たようないしだいです。早速、実習道具を全部揃えるから遠慮なく申し出なさい。その上で父兄会の幹部の方々に相談して、とにかく揃えましょう。」

私も嬉しくなつて、直ちに必要な器具類を書き出しました。お陰で学校の方で全部揃えてもらう運びになりました。教師の一念岩をも通すというところですよ。

大正十年ごろの東京横浜あたりの家庭科の実習がこの程度では、まったく話になりません。

いわんや、地方の都市や農村はおして知るべしであります。

東京で料理修行

私が福岡を去つて横浜市に出て来たのには、もう一つ大きな目的があつてのことでした。

それは昼間は教員として学校の職に奉じ、夜間、日曜日、長期休暇には、東京や横浜にある日本料理、西洋料理、中華料理店の一流と目されるところの料理人から指導を受けたいという念願があつたからです。実際に、夜間や、日曜日は京浜電車に乗つて東京に出かけ、一流の料理長やコックさんについて親しく学びました。

名物料理の店と聞けばそこに入り込んでじかに学んだものですが、そのうちの数例をここに披露しておきましょう。

(1)西洋料理はまず一番に帝国ホテルに入り込みました。今日では東京にも随分大きなホテルができておりますが、大正十年ごろではホテルといえば帝国ホテルが代表で、洋食は帝国ホテルといわれたものです。横浜で懇意にしていた石川女史に頼んで料理長に紹介してもらつ

て、入り込むことができました。この方は腕もすぐれていましたが、また人物も立派な方です。コックさん方が料理を作っておるのを見せてもらっては、その料理長に質問をし、ノートしていきました。ソースの秘法は直接教えてはくれませんが、それでもいろいろと見聞きして、ドウミングラスソースやブラウンソース、トマトソースやマヨネーズソース等々と習得いたしました。

(2) 中華料理は雅叙園で教わりました。このころは雅叙園が新築店開きしたばかりで、建物は東洋一といわれるくらいでした。それにもまして、内部の装飾が、これまた素晴らしいものでした。絵なども一流の画家のものばかりで、まるで極楽浄土にでも遊んでいる気がしたものです。料理は北京料理と上海料理でしたので、両方とも勉強するこゝとができました。これら勉強したものは細大漏らさず記録したものです。

(3) 日本料理はあちこちで教わりましたが、強く印象に残っているのは、両国橋のたもとにあった料亭中村です。国会議員の宴会などよくあつていました。私が見た一番大仕掛けの宴会は、国会が終了して大正天皇から鯛の下賜があつたときのことです。このときの料理は、大阪でとれたスツポンの料理や大鯛の生作り、その他、珍しい料理ばかりで、これにお給仕はお裾引きの紋付、丸帯姿の芸者さんで、さすがに東京だな と、その豪勢さに舌をまいたものです。このような大物をこなしきる調理の大家がいられる東京は、よい稽古場なのです。

そのほか、休日には、東京の料理店で味の良いところを食べ歩きしたり、腕の達人などところに入り込ませてもらい料理長や料理人の腕を盗み歩いたものです。盗み歩くというところ、いかにも聞えは悪いのですが、鮎でも、天ぷらでも、何でも、東京一との評判をとっている店に入り込むことは、料理の研究を志す者にとっては非常に参考になることが多いのです。鮎ひとつにしても、一流の鮎屋の主人になると、幾十年

もの間、鮎だけに熱中して苦勞と工夫と研究を積んできておられます。これを見せてもらい、いろいろと指導を受けると、その道の名人の幾十年にわたる成果が一度に吸収できるわけです。まことに好都合なのです。すまない気がいたしました。そのような要領で勉強しました。

(4)東京で一流のある鮎屋の例をあげてみましょう。浅草観音様近くにそのころ数十軒の鮎屋が並んでいましたが、そのうちの軒だけはいつも満員盛況です。そこで私もその店に入って食べてみました。酢の加減、塩加減、甘味の加減、それに飯の炊き方、何ともいえない出来栄えです。

これは是非教えてもらいたいと決心し、店のご主人に会ってお願いしましたが、なかなかうんといつて承知してくれません。大切なコツを盗まれては商売上つたりになりますとの返事。私はなおもねばっていました。

「私は横浜のある高等小学校の先生で、決して鮎屋を始める者ではありません。家庭科の教育の参考にするに過ぎないのですから、是非お宅の鮎のつけ方を拝見させていただきたいのです」

と、少々の謝礼を出してお願いしました。ご主人もこれは感心な先生と思つてか、今度は気持ちよく許してくれ「それでは奥に入って鮎をつけているところを御覧になったらよいでしょう」といつてくれました。私は飛び立つ思いで、「お許し下さいませ」と奥の調理場に駆け込みました。

まず御飯を高圧釜でふわふわと上手に炊いているのが目につきました。しかし、ここで最も感心させられたのは、鮎の調味料の加減と鮎のつけ方に工夫研究が積まれていることです。さすがに十五、六歳から五

十幾歳まで三十五、六年間、鮭一途に凝って研究苦勞したな一と感じ入りました。

ここで、その店の鮭のつけ方を披露しておきましょう。

(イ) まず合せ酢の調合

米一升(九カップ)につき

米酢一合三勺(一・二カップ)

塩八匁(三〇瓦)

砂糖二十匁(七五瓦)

味の素少々

この分量は人により幾分の差はあっても構わないが

(ロ) 一番大切なコツは釜からとり上げてすぐの温かいご飯の温度と、酢、塩、砂糖、味の素を鍋に入れて熱を加え、これがやっと溶け合ったときの温度が一致しなければいけない点です。

つまり、あつにご飯に、それと同温度の合せ酢を一方から順々に振りかけながら、杓子で軽く混ぜ続けてつけ終り、大体合せ酢がよく混り合ったときに、急に上の方からうちわであおぎ下ろし急に冷やす。こうすると鮭の風味と飯粒の艶が出るところが、この店のコツでした。それに、この店では千客万来なものですから、人手をかりてうちわであおぐくらいでは間に合わず、天井に大うちわをつけてこれを電気仕掛けで動かす工夫も凝らしていました。

鮭は急に冷やすと飯粒が立つとか艶が出るとかいいますが、なるほどとうなずけます。その鮭を握りにしたり、押し鮭にしたり、盛りつけにすることはどの店でもやっていることで別段珍しいことではありません。

私はよく中村式鮎として、学校や講習会で紹介してきましたが、そのつけ方はこの浅草の鮎屋の方式をとり入れており、鮎そのものとしては、いまひとつ神戸の八雲鮎を参考にしています。

ついでに、ここで記録に残しておきましょう。

(八) 神戸の高級八雲鮎

この八雲鮎は東京鮎よりいつそうご飯がやわらかで、しかも飯粒が少しもこわれず、何ともいえない風味があります。これは上等の出し昆布の水だしを作り、この昆布だし汁でご飯を炊くからです。

そのだし汁の濃さは、およそ水十カップにつき昆布二十センチ(巾は普通)程度の長さのものを使います。最初に昆布の塩気をよく拭きとって、これをボールに入れ、この上から冷水十カップを強く打ちかける。そしてその後、水をすくっては昆布に打ちかけることを数回くり返し、それが終わるとそのまま二十分間位放置しておく。すると、おいしい昆布のだしが水に出てくるわけです。このとき気をつけねばならぬのは、昆布を余り長い時間水に浸しすぎると、いわゆる昆布が風邪をひいてヌルヌルが出てきて風味をこわすことです。二〇分くらいつけてヌルヌルがでない程度でボールから昆布を引き上げ、このだし汁を使ってご飯を炊くのです。

八雲鮎は角型に打ち込んで長方形に切って出すのですから、ご飯はかた目よりも少々やわらか目の方がよい。ただこのとき注意せねばならぬのは、合せ酢を混ぜるときにご飯がやわらかいのでよほど慎重にやらないと、ご飯粒がくずれてしまつて糊のようになり、こうなると食べられたものではありません。

この神戸の高級八雲鮎は、明石でとれた生鯛を三枚におろし、胸骨をとつて酒の中に塩・砂糖・酢少々を合せた中につけこみます。この味

つけた鯛を刺身型に切つてご飯の上へのせ、肴とご飯の間にワサビを少々入れて押し型で角型に押し出し、適宜長方形に切つて、これを一人前宛皿に盛つて出すのです。別に、何ひとつそえ物はつけない鯛鮓ですが、大阪風の具のゴテゴテした鮓とは違い上品で、天下の珍味といわれる鮓料理だと思います。

(5) 新宿中村屋の印度式カレーライス

いろいろと食べあるきして最もびっくりさせられ、また思い出の深いのは新宿駅の近くの中村屋というパン屋の特殊料理である純印度式カレーライスについてであります。俗にインディアンカレーライスといっていました。

このカレーライスは日本一だという評判ですから、料理研究を志していた私としては、何とんでもこのインディアンカレーライスの全貌をつかまねば腹の虫がおさまりません。ある日曜日の朝、この中村屋を訪づれて、まずパン屋の奥の間のカレーライスの店に入り注文いたしました。

普通、日本式のカレーライスはメリケン粉でドベリをつけている加減か、御飯の上にかけてた姿を見ると、まるで猫のタバキ(吐き物)のかった感じで、私なんか口をつける気持ちが起こりません。ところが、皆さんはこのタバキのようなカレー煮をスプーンで御飯にまぜてさもおいしそうに飯べておられます。

本式の印度式カレーライスは、そんなドベドベしたものではありません。

給仕人が持つて来た中村屋のを見ますと、飯一人前と別にカレー煮の方は綺麗なカレー鉢に盛つて盆の上に飯皿と並べておき、スプーン一本そえているのです。

なるほどな一と、第一番に感心しました。聞けば、カレーライスそのものは実は印度人の食べる雑炊だそうで、印度や南方方面の酷暑の地ではカレー粉を炊き込んで舌が切れるくらい辛味をつけて食べねば辛抱ができないところから、印度や印度シナ方面ではこの料理が好まれているとのこと。

そこで、まずカレー煮の方を調べてみました。姿はドベドベしないでサラサラしていて、日本の吸物にちよつと粘り気のある程度。一口味わってびっくり、辛くて辛くて目の玉が飛び出るとはこのこと。いかな私も閉口しましたが、その辛味のなかにいつにいわれぬ旨味を含んでいます。

中の具を調べてみますと、(1)鶏の骨付き身二切れで、これはちょうど日本の水炊きのときの鶏肉くらいの大きさで、に入れると簡単に身と骨がはぐれます。(2)大切りの馬鈴薯二切れ―これも形は大きい。が、フワフワと煮えて口に入れるとすぐとろけるほど白あとは玉葱五、六切れです。

汁の方は何かミジン切りみたいなものが少々混っているだけで、サラサラと黄褐色ですが、その辛味とうま味の配合は何ともいえません。

さすがに日本一といわれるほどのことはあると感服いたしました。

一人前食べ終わっているいろいろ考えました。このカレーライスの味は何からとつた味だろうか。

まさか鶏肉や玉葱だけであれだけの味は出るものではない。私の探求心からこのままですむはずもなく、思い切って帳場に行き調理場の見

学を願い出たのであります。ところが、キツパリと断われました。

しかし、何としても諦め切れません。横浜に帰って、日夜このことを考えているうちに一計を考えついたのです。「それはこの中村屋が本来パン屋であるのにカレーライスを営業して天下に名をなしているのは、中村屋の一人娘の養子婿にビハリ・ボースという印度独立の志士がいるからであろう。このビハリ・ボースならば、印度の独立運動に身を投じて英国の官憲の目を逃がれている身です。日本に上陸して以後、困っているときに、私と同じ郷里西新町出身の頭山満翁がかくまってやり、その後この中村屋に婿入りさせたと聞いている。よし、ここは一つ頭山満先生の御力添えを願おうと」。

これはよいところに気がついたというわけで、早速頭山満先生の屋敷をたずねて行きました。カレーライスの話をして、その調理法を教わりたいので、是非調理場に入れるよう取り計らってくださいと訴えました。頭山先生も感銘されてか、それほど熱心ならば、郷土の後輩としてビハリ・ボースに頼んであげようといわれ、紹介状を書いてくださいました。ビハリ・ボースにとっては、頭山先生は命の恩人。おかげで一も二もなく、調理場に入ることを許可されたのです。

さて、調理場に入ってびっくり仰天。鶏の臓物といっても大腸、小腸が、山のように積んであるのです。そのころの日本では、肝臓とか砂ずりなどはともかく、その他の臓物は捨てていた時代です。それなのに腸の山積みを見せられたものですから、年若い私が肝をつぶすのも無理からぬこと。そこで、いったいこの腸はどうするんですかと尋ねて二度びっくり。この腸が中村屋のカレーの素ということ、腸のミジン切りがカレーのドベリのもとをなしていたのでした。

次にカレー粉が特別辛くて、しかも高尚な風味のあるのは何故かと質問しました。

「この店ではカレー粉は一種でなく、印度産のほかにはシヤム産、フィリッピン産等々三種類も四種類も混用しています。そのほか、いろいろの香辛料を混合して、このように強い、良い香気と辛味を出しているんです」

ということ、それぞれ実物を見せていただきました。

つまり、カレー煮はスープとカレー粉、その他の香辛料とほどよいドベリに鶏の腸のミジン切りのカレーの素が主で、中の具はたいして大切なものでなく、何はおいでも味と辛味、香気に重点を置いて調理すべきものと聞いて大いに啓蒙されました。

(6) 中村式カレーライスの考案

中村屋のカレーライスは汁があまりサラサラして澄し汁のようで、これでは日本人の好みにどうか一と考えました。帝国ホテルのやり方を見学いたしましたところ、ここではドベリを出すのにメリケン粉は使わず、中華料理によく出てくる餡の考えを入れております。すなわち最後に片栗粉の水溶きしたものを流し込んで、艶とドベリを出す方式です。

私がよく言っている中村式(中村屋ではありません)のそれは、以上の中村屋のインデアンカレーライスを基本に、それに帝国ホテル式および私独自の考案を加味して作り上げたものです。

少しくだいていいますと、中村式というのは、中村屋のカレーライス方式を基として、これに玉葱、人参などの野菜の切り屑を鶏の腸にまぜてドベリとし、甘味には砂糖のかわりにトマトケチャップを少々使用したこと。また、ドベリには帝国ホテル式の片栗粉を用いる中華料理館の考えを入れたことなどあります。

御飯の炊き方も、白米だけにしないで美観を添えるため、グリーンピースや小さく細の目に切った人参を入れるなど、見て美しく、食べておいしく、そして栄養の点を考えております。

およそ、料理の研究を志す者は、先輩の人々が研究し遺された美点を謙虚に学びとり、さらにこれに満足しないで自分でもなおそのうえに風味の上から、あるいは栄養の点から、さらに考案を重ねてより以上のものを創作していく心掛けが肝要と思います。

現に、わが中村料理学院で教えていますカレーライスには、印度人ピハリ・ボースの印度式カレーライスを基として、これに工夫、考案を加えて改良し風味の点でも日本人向きに、栄養的にも理想に近づけており、その苦心の結晶をみていただきたいと思えます。

感心した看護婦教育

この横浜在職期間は、未だ年齢も若く、家庭科教育についての研究意欲最も旺盛な時代でした。家庭科の範囲に含まれる分野の研究では、前に述べた料理のみに限らず、被服以外の住居、看護、衛生、育児、家庭経済について東京女高師、目白の日本女子大学の夏期、冬期講習にはたいてい出席して受講し、先輩の諸先生方の研究の成果を勉強させていただきましたが、これらについては特に記録に残すほどのことはありません。ただ看護、衛生の勉強については、その後の私の教育のあり方に強い影響を与えたようですから、ここで記録に止めておきましょう。

病人の看護法は家庭科の教科の中の一単位をなすのですが、これは高等師範や女子大の講師の先生よりも、むしろ実地に看護婦さんについて勉強した方がよいのではないかと考えました。

そのころは、看護婦さんといえば、日本赤十字社の看護婦さんが教育も徹底し訓練も行き届いていると聞いていました。日露戦争後の影響もあつてか、女性の一種のあこがれの対象にもなっていたのです。そういう関係で大正十一年八月、横浜市教育課長児崎為槌先生にその趣旨を話し、市教育課から紹介してもらい、二十日間の予定で、東京渋谷にある大日本赤十字病院に見習い看護婦となって入り込みました。

横浜からの通勤で、朝は七時に病院に入り、内科病人の看護の仕方、負傷者の手術のときの看護婦の仕事、縄帯の巻き方、傷の手当、産婦人科の看護の仕方、小児の病人の看護の仕方、しまいには伝染病の看護まで指導を受けることになりました。あまり親切に、これもあれもと仕込まれましたが、さすがに伝染病室だけはこわくなり、こちらからお断りしたいくらいでした。しかし、いったんお願いした以上逃げるわけにもいかず、チブス、赤痢患者の病室まで入り込んでの勉強でした。

伝染病棟に入るときは、あらかじめ、消毒された白衣に着かえたり、その他たいそうなことでしたが、係りの看護婦長さんがチャンと準備してくださっていましたので安心はしました。

この日赤病院で受けた看護法の訓練はその後大いに役立ちましたが、実はそのほかに教育上大いに参考になったことがあるのです。それは看護婦さん方がきわめて（１）礼儀正しく、（２）規律も厳正（３）態度が軍人のようにしっかりしている（４）しかも慈愛深く（５）動作がキビキビしている、ことでした。

服装も上品、軽快で、女性の私どもが見ていても惚れ惚れするいでたちですし、履物も上靴でゾロンゴゾロンゴでなく、コツコツと威勢よく歩いていました。それを見た私はこれはひとり日赤の看護婦さんに

限らず、女子大生や女学校生徒の訓練や服装も、このようにしなければならぬのではないかとしみじみ考えさせられました。

博多弁丸出し

この横浜時代で、私の一番のりが手は言葉づかいでした。なにさま早良郡西新町の生れで、昔から福岡独特の方言やなまりがある。現在のようにならぬ標準語を使うよう小学校で指導もしていない時代ですから、福岡で三十六年間も育った私が中央に出たからといって、にわかにならぬ東京弁が使えるはずありません。それに自分の生まれた郷土の言葉を簡単に捨てる気にもなれない頑固な私でした。

ところが、私が料理の方は深く研究しているものですから、視学の先生から婦人会への料理講習を仰せつかります。料理はうまいが、さて、言葉の方は「ドウスルケン、コウスルケン」「コウシヨルバッテンガ」「ナニシガツシャルトナ」「コゲンスルトバイ」「フテーガツテドウジャロカイ」「コゲナヨカコトハホカニナカバイ」云々と博多弁丸出しでやるので、婦人会の方々から「中村先生は料理はうまいが、言葉のわからないところがあって困る」との批判が出てきました。

視学の先生からも「中村さん、言葉を少し東京風に変えてくれんかねー。婦人会員から言葉がよくわからないところがあると、苦情が出ているんだよ」と忠告されました。けれど、とうとうこればかりはなおりませんでした。また、変えようともしなかつたのです。

岡野高等小学校の生徒も、中村先生の言葉は鹿児島と同じでどうもよくわからないところがあるとこぼしていましたが、教授法がうまかつたので授業は皆喜んで受けておりました。

これでも待遇の方は横浜市小学校女教員中最高級で、東京の木内きよ

う先生と私の二人が小学校女教員の日本における最高級待遇だったのです。

そのころは全国女教員会という組織ができていまして、毎年一回東京で大会を開催していました。この大会には、全国から研究熱心な優秀な女教員が参加し、それぞれ研究発表を行なったものです。この世話は帝国教育会が担当していましたが、その幹部の野口援太郎先生はよく世話の行き届く方でしたが、同郷の関係もあってかよく私を可愛がられ、いつの間にか私は全国女教員会の幹部級にまつり上げられました。

悲惨！関東大震災

大正十二年九月一日。その日は朝からサーツと吹き抜けるような風が強く、日中になるにつれて温度も上り、おまけに時たま雨もぱらつく無気味な天候でした。

朝のうちに二学期の始業式はすみ、生徒は全部帰宅しました。そのころ、私は文部省が行なっている中学校家庭科教員の検定試験を受けるため懸命の勉強をしていました。その勉強を、平素は二階の裁縫室でやっていたのですが、この日だけは、どうしたわけか中庭への出口に近い私の担任教室の入口のところに机を置いて始めていました。

お昼ごろだったと思います。雨がパラパラおちてきましたから、小使さんが私のところに来て「先生雨が降りそうになってきましたね。修理に出していた雨傘を、とって来ておきましょうか」と話しかけてきました。私も「それではお願いします…。」と行って、修理代をあげておこうと左側の本棚の上においていた財布を取ろうとしたときです。

その瞬間、万雷が一時におちたかのようなごう音とともに校舎がゆら

ゆらつと揺れました。

「先生っ、地震ですぞっ！！早く逃げなさい！！」小使さんはそう叫ぶなり、すっ飛んで行ってしまいました。

私も財布、時計は置いたまま、草履を片足につっかけて、無我夢中で中庭に飛び出しました。

しかし、こんどは地面が上下に動いていて、とても立つてはおれません。すぐ地面に平つくばいになって見えているうちに、五十間(九十メートル)もある岡野尋常高等小学校の新築本館が、あっというまにベシヤンコになってしまいました。

とみるまに、崩れた校舎の西側の端の方から火の手があがりました。そして、炎は折からの風にあおられて見る見るうちになめるような勢いで全体に拡がり始めたのです。「ここについては危ない」と直感した私は、這うようにして中庭から逃げ出し、便所づたいに校外に走り出しました。

道という道には大きな亀裂が入っていて、危なくて思うように走れません。裂け目に足をとられぬよう気をつかいながら、神奈川県立女子師範学校の松林目がけて急ぎました。

命からがらやっこのことで女子師範学校にたどりついたら、消防隊がやって来て大声でどなりました。

「ここも危いから、向うの山の上にある私立神奈川女学校に避難せよ」
こうなっては指示通り動くのが一番と、皆と一緒に山の上の女学校に落ちのびて、やっと一息つくことができたのです。

人心地ついて横浜市を見下ろすと、家はもちろん川の水まで炎をあげて燃え盛っています。木造の家は全滅状態で、このとき初めて地震の恐ろしさを知りました。

消防隊はいましたけれども、このような大天災になると、自分の家がつぶれるやら家族のことが気にかかるやらで人事どころではなかったのでしょうか。思うように消火作業もできなかつたようです。

横浜市は一面焦熱地獄に変わっていました。火災も恐ろしかったが、それ以上に恐ろしかったのは人の心でした。よく地獄の様相といいますが、このような混乱が起こりますと、平素は紳士然として人間間の皮をかぶった動物同然。まるで猛獣の姿になって恥も外聞もなく、食物を盗んだり、倒れた他人の家の中をあさって着物をとったり、金を盗んで知らぬ顔。まったく無警察状態の世の中を現出したのです。それにいろんな流言ひ語も飛びました。

やっこのことで命拾いした私は、山を下りて宿舎に帰って見ますと、崩れてはいますが焼けてはおりません。何とか雨露はしのげそうです。が、食べ物がありません。ところが、ここに本当に嬉しいことで救われました。それは、岡野小学校の生徒に、学校の近くのいわゆる貧民街から通っている者がいました。家は貧しく、食うや食わずで、その生徒はもちろん身なりもよくありません。私は宿舎から学校に通勤するのに毎日そこを通っていたものですから、その生徒のお父さんも私のことを知っていたのでしよう。震災直後、私のところに見舞いに来ていってくれました。「中村先生は女の先生のことですから、米をかつぎ出すこともできず、食物がなくて困っておられるでしょう。実は、私たちは役所の指令で国の倉庫に入っていた米だけはとつてもよいとのことでしたので、力にまかせてうんと取って来ております。これをひとつ分けてあげましょう」

米の量はわずかでしたが、このような無学の人が日頃の恩に感謝して申し出る行為の美しさ、嬉しさ。それに引きかえ、平素紳士然としていた人のあさましい行為ほどみにくいものはありません。

やがて、地方からの救援物資が送られて来たのか、横浜市役所からの達示に「大阪、神戸からの見舞品として玄米がたくさん届いたから配給します。受取りに来るようにな」とのこと。食糧不足で空腹に悩んでいた市民が、まさに早天に慈雨を得た思いで喜び勇んだのも当然です。

ところが、白米とは違い玄米飯は、よほど気ながに炊かないと御飯にはなりません。

市の役人方も震災後の世話で、日夜ぶつとおしの活動をしているので、私に「役人方へ玄米飯の炊出しをしてください」との依頼がありました。私も同じ市の教員ですから、断るわけにいかずこれを引受けることにしました。

朝食の準備は午前二時に起きて炊き始め、途中で水を追加すること二ないし三回。時間も二時間ないし三時間かけてゆっくり炊かねば玄米の飯にはなりませんので、ずいぶん苦労しました。

そのころ有名な栄養学者で玄米飯を奨励している方がありましたが、炊き上げる時間と燃料の消費、食べたあとの不消化、おいしくないなどの点から、やはり、米は外皮をはいで七分搗きとか半搗米にするのが理想だと思えます。

震災直後といっても、あの恐ろしかった九月一日から数日たって、私は生徒二名をつれて横浜市内を見て歩きました。普通の瓦葺きの木造住宅のほとんどは崩れたり、焼けたりしています。鉄筋コンクリート

造りの室町小学校と正金銀行は残っていました。そのほかトタン葺きの家がチラホラと残り、山手の方の家はかなり残っていました。水道は破壊されて水は出ません。井戸の水が唯一の頼りです。

道を歩いていると、そこここに人間の焼けた死骸や、馬や牛の焼死体が転がっていて、とても見るに見かねる悲惨な状態です。とくに目をおおわしめたのは、正金銀行の惨状です。この建物は横浜一の鉄筋の豪華なものでした。従って、ここに避難しておれば大丈夫ということ、男女市民数百人がこの建物に逃げ込んで来たのです。ところが、横浜市全体が火の海になってしまったので、正金の建物は焼けないが、まわりから押しよせて来る熱と炎のために窓硝子がやられて、炎が建物の中にまで吹き込んで来たのです。中に避難していた人はたまりません。逃げ出す場所がなく、全員焼死という事態になってしまったのです。しかも、焼けただれて顔かたちも分別できないほどになっていました。とにかく、市内を歩いて見たり聞いたりするものすべてが「悲惨」の一語に尽きる状況でした。

このような横浜に、九日間頑張っていました。学校が始まるわけではなし、私みたいなのよそ者は、目的を失ってしまうと心細くなってきます。

そこで、視学の中川先生に頼んで、一応郷里の福岡に帰省させていただくようお願いしました。

先生も気の毒に思われたのか、市当局に願い出で許可がありました。久し振りに故郷に帰る「だから晴着でも着て帰りたい」といったら、中川先生がおっしゃいました。「晴れ着でも着ていたら、それこそ大変だ。この震災で人の心はすさみ、荒れ狂っている。途中で着物をはがされ、殺されるかも知れない。大事をとって寝巻の単衣に草履をはき、

頭に手拭いをかぶった乞食や避難民の姿でなくては危ない」

そこで、私の宿舎は崩れはしていても焼けばしませんでしたので荷物を整理して中川先生の家にあずけ、私は先生から教えられたとおり乞食姿になって、天井のない貨車に乗り込んで横浜駅を発ちました。

途中、名古屋駅で避難民として握り飯や茶菓などの接待を受けました。大阪、神戸、岡山、広島と汽車が駅にとまるごとに、握り飯や衣類の寄贈を受け、同胞の温かい厚情に感激しながら、まる一昼夜かかって、やっとなつかしい博多駅につきました。

”亡霊” 故郷に帰る

横浜で九日間、風呂にも入らず、顔もろくに洗っていないうえに、無蓋貨車で二日間さらされてきたのです。おまけに、寝巻きに草履のいでたち。頭には手拭いをかぶっているのですから、誰が誰やら見わけがつかないのもあたり前です。駅のホームには婦人会の方々がたくさん出ておられて、佐賀や熊本方面に帰省する罹災者にいろいろと接待されています。ホームに降り立った私は婦人会の方々に「ただいま、横浜から帰りました」とあいさつしたのですが、一向取り合おう風もなく、ただ「ああー、そうな」だけ。

他県の人々には忙しそうに接待しているのに、全滅といわれた横浜から辛くも避難して来た私には「ああー、そうな」だけとは情けないと腹が立ちました。けれど、我が家に帰れば手厚くしてくれるであろうと思ひ直して、ホームを通過して改札の方に出たとたん、新聞社の記者の皆さんに見つけられました。

新聞記者はさすがに勘がよいのです。やつれた乞食姿の私が中村ハルと知って、五、六社の新聞記者が私をとり巻いて質問攻め。

「中村先生、ようこそ無事で帰って来られましたな！。横浜市は全滅と電報が入ったまま一人も帰って来る人もないので、やはり福岡県人は全滅かな」とあきらめていたんです。よかった、よかった」

それから根ほり葉ほり、福岡県出身の人々の消息をきかれます。

「中川直亮先生は、児崎為槌先生は、久芳龍造先生は…その他あれこれ」

「いま、おっしやられた方は、だいたい命だけは助かっておられます。私だけ一足先に帰って来ました」

そして、私は横浜市で見たり聞いたりした震災の模様を逐一話してあげました。

「川に流れ込んだ石油に火がつき、川まで三日三晩燃え続けていました」

「瓦葺きの家は一ぺんでペシャンコになりましたが、トタン葺きの家はチラホラ残り、山手の方の家はだいたい残っているようです」

惨たんたる横浜の様子を説明したものですから、新聞社としては横浜の状況がよくわかったと大喜び。早速、翌朝の各新聞に

三日三晩川の水まで燃え続けた横浜市

中村ハル女史の帰省談

と発表したものです。

やっと新聞記者から解放されて我が家(といっても、父は大正十一年九月に病没していたので姉の保坂の家)にたどり着いたのが夕方のことです。「姉さん。私、今帰って来ましたよ」と声をかけると、じっと見ていた姉が裏口の方に逃げ出します。私の亡霊とでも思ったのでしょう。私は姉を追いかけてなんども繰り返さなければなりませんでした。

「ちがう、ちがう。私は亡霊ではありません。ハルですよ。生きて帰って来たんですよ」

姉はまたじっと私の顔をしばらく見ていましたが、やっと本物とわかって「ハルしゃんなー! あんたは生きとったとな」というぐあいです。そしてつけ加えていうのです。

「今度の震災で横浜は全滅と新聞で知って心配になり、実は易者のところに行つて占ないを立てたら、一人の易者は死んだといい、もう一人の易者は助かっているというもん。その後、何の音沙汰もなかけん、矢張り駄目だったかと諦めとったところよ。ハルしゃんな可哀想なことをしたと悲しんだるところに、姿を現わしたもんで、てつきり、これは亡霊が姿を見せたものと早合点した。すまんやった、すまんやった。それにしても、その格好じゃ思い違いするよ。まあ、何はともあれ座敷に上がつてゆつくりしなさい」

それから、姉が喜んで、家中大騒ぎになりました。それというのも、私どもの実母は姉が十四歳、私が八歳のとき亡くなり、父も前年に亡くなっていました。

母亡きあとは姉が母代りとなり、姉が保坂家に嫁いだからも、何やかやと私の面倒を見てくれたのです。姉にしてみれば、一時は諦めていた妹がヒョッコリ現われたのですから、その喜びは大変なもの

だったと思います。早速、風呂を沸かして十二日間の垢を落しなさいと、姉自らが私の身体を洗ってくれました。

久し振りに風呂に入って垢をおとし、人心地ついた気持ちになりました。その晩は家族一同揃って、無事を喜ぶやら、震災の恐ろしい話をして時の経つのも忘れるくらいでした。寝に就くのが遅かったのと、旅の疲れ、横浜の苦労が一度に出て、翌朝はどうしても頭があたりません。午前八時ごろまでぐうぐう寝込んでしまいました。

ところが、姉が私をゆり起こして「お客様ですよ」とのこと。目はさましたが、姉が私をゆり起こして「お客様ですよ」とのこと。目はさましたが、頭はあがらないので、布団の中から「お客様とは誰ですか」と聞いてみますと「いま、福岡市の婦人会の幹部の方々が二、三人みえているんですよ」という。

私は婦人会と聞いて、実はあまりよい気持ちはしない。昨日のあの駅のホームの冷淡な扱い方が頭に残っていて、むしように腹が立っていたからです。

私のみじめな姿を見て、暖かい取り扱いをしない婦人会。第一、避難民だから、そんなきれいな格好の出来ないことくらいはわかりそうなものかと思っていたから、気がすみませんでした。しぶしぶ起きて、お会いしました。

「昨日はどうも失礼いたしてすみませんでした。中村先生がまさかお帰りとは夢にも知らず、誰だろつかくらいに扱ってすみません。そこで今一度御迎えをやり直しますので、面倒でも博多駅に戻っていただきたい」と、幹部の方が懇願されるのです。

何と馬鹿々々しいことをいい出したのだろう。福岡市の婦人会は、何と田舎くさいことをするのだろう。自分はいま、横浜で女教員の上席に位しているだけのものにすぎないのと思っていましたが、姉がし

きりに「ああまでいっておられるのですから、婦人会の方々の気のすむようにしてあげなさい」といいますので、仕方なく博多駅まで出向きました。そして、おかしくはありましたが、出迎えのやり直しをしていただきました。

聞くとところによると、その日朝の新聞を見て、昨日の乞食姿が「さては中村先生」と気づいて、この騒ぎになったそうです。それにしても、考えてみるとまあ親切なことではあります。

さて、いったん郷里に帰って来たものの、丸焼けになった学校の跡始末や、生徒の授業などが気になり始めました。そこで、横浜が落付き次第、また学校に戻って、今後の計画を立てなくてはならないなと思っているところに、横浜市役所の方から小学校児童の教科書を古本でよいから福岡県の方で、できるだけたくさん蒐集して、横浜の方に帰って来るようにとの連絡に接しました。私も、これは最も大事な仕事だと考え、すぐ福岡市役所を訪れ、市内各小学校で各学年にわたって教科書の古本を集め、横浜に送ってくださるようお願いしました。市教育課も喜んでこのことを引き受けると、約束されました。

続いて、八幡市役所、小倉市役所、門司市役所、それから久留米、大牟田市役所まで足をのばし、横浜市の尋常小学校、高等小学校あてに教科書の古本を多数御寄付くださいますよう、お願いして回った結果、予想以上の教科書が集まり、これを一纏めにして貨車で横浜に送りました。これらの教科書は全部、福岡県から横浜市への寄付として扱われました。

各市訪問の旅費などは、ちょうど私が手許に持っていた現金七十円ばかりが役に立ちました。

教科書集めの仕事が終るとともに、私はまた横浜の岡野高等小学校に

帰任しましたが、そのころはまだ余震がときどきあり、東京、横浜はこわい都市だな一と思ったものです。

生命を守ってくれた弟の靈魂

関東大震災を体験して、いやというほど震災の恐ろしさを痛感いたしました。それと同時に、人間の運命の玄妙さと申しましょつか、因果応報とか、われわれがいつているが、これも実感として味わいました。端的にいえば、靈魂の不滅を信じるようになったのです。

考えれば考えるほど、この大震災で私が命拾いしたことが不思議でならないのです。

前にも述べましたように、私はこの年の夏休みを文部省が行なう教員検定試験を受けるための勉強にあて、それまではいつも二階の裁縫室に閉じこもって勉強していました。この九月一日は始業式がすんで生徒は皆帰り、学校に残っていたのは私と若い男子の先生方四、五人、そして小使いさんだけです。先生方は職員室で暮を打っておられました。私だけはいつもの通り二階の裁縫室に行つて勉強を始めたのですが、暑くて暑くてしょうがないものですから、参考書を引っさげて一階の自分の担任の教室に移動しました。しかも、暑い暑いといって教室の入口に机を動かして、片足は廊下に突き出して勉強を始めたのです。そのうち、小使いさんがやつて来て、修理に出した雨傘のことをたのんでいるときにあのゆらゆらです。小使いさんの「先生地震ですぞっ」早く逃げなさい「」の叫びに、無我夢中で中庭に飛び出して腹這いになって見ているうちに、校舎はペシャンコに倒れてしまいました。この間、一分間くらいたっていたでしょうか。間もなく倒れた校舎の一隅から火が出て、あたり一面またたく間に火の海に包まれてしまったのでした。私は辛うじて山の手に逃げのびて命を全うしましたが、職員室に残っておられた四、五人の男子の先生方は行方不明と発表さ

れました。おいしい青年教師の方たちでしたが……。

それにしても、その日いつものように二階の裁縫室で勉強していたら、とても逃げ出すひまもなく、あわれ校舎の下敷となり……と想像し、その日に限って一階のしかも中庭にすぐ飛び出せる所に移動していたことが、私の運命の岐れ目になったと考えるとき、何かそこに人間わざでなく神仏の加護を信ぜざるを得ません。

そこで思い当たるのは、弟関次郎が沖縄の地で死期をさとり、私に送った手紙のことです。

「病床について十数年のながい間、母代りとして姉さんに本当にお世話になりました。この大恩は、たとえ死んでも忘れることはできません。不幸にして、私は先立つことになりましたが、霊魂不滅を信じています。私の霊魂は必ず残って、姉さんの生涯を守り抜き、せめてもの御恩報じをいたします」

人は、あるいは、それは迷信だとか、自分の勝手なひとりよがりだとか申すか知れませんが、私にとっては、正真弟の霊魂の加護としか考えられません。

それ以来、今日まで、何か事あるごとに、常に弟の霊魂が私を見守っていていてくれるのだなという信念を強く持たされること再々であります。今日、私がかくあるのは、私自身平素誠実にコツコツと努力を重ねた結果と、それにもまして、数多くの方々の善意による引立てと御協力の賜物であることは常々肝に銘じておりますが、それ以外にもう一つ何か事が難かしくなつて、にっちもさっちも行かなくなるような難局に会つと、不思議と自然に運が拓けて来て、物事が順調に運びはじめ人間以上の何等かの力添えがあるのではないかと痛感されてなりません。このよつなときいつも弟関次郎が言い遺した言葉の真

実を忘れることができないのです。

第三部努力は涙とともに

新しい世界を神戸に求めて

震災後一応横浜に帰り、以前と同じく岡野尋常高等小学校の教員として勤務しました。しかし、校舎はいつ建つか見通しがかず、樹の下を借りたりしての勉強。先生方のなかには亡くなられた方も多く、とにかく授業も思うように手につきません。それでも、私が横浜市民なればどうでもこうでも学校が復興するまでがんばらねばならないところですが、もともと私が横浜に赴任して来た大きな目的の一つは、中央に出て料理と家事科の勉強を進めたいことにありましたから、この関東大震災は私の修業計画を大きく狂わせてしまいました。

とって、みすみす福岡に帰る気にもなれず困っていたときに、また新しい道が拓けて来たのです。

横浜市体育課に勤務されていた今井学治先生が、震災後、神戸市兵庫尋常高等小学校に校長として転任されました。今井先生は以前福岡県男子師範学校の体操の教諭をしていられた関係で、私ともじつ懇の間柄でした。この今井先生が神戸に着任されて、ときの神戸市教育課長横尾繁六先生に私のことを詳しく話されたとみえて、神戸市から赴任の方の打診がありました。私自身としましても、すでに横浜在職三年以上にもなり、東京方面の名流料理だけはだいたい学んだことだし、今度は京都、大阪、神戸方面でさらに料理の勉強をしたいと念願していましたので、校長の久芳先生に事の次第を話し相談しました。久芳先生もこれを諒とされ、特別の計らいで、神戸市に赴任することが決定したので。

このとき、横浜市教育課では震災後の困難な時期にも拘わらず、特別の扱いで月俸を百円に増俸してくれましたので、神戸市の方ではさらに一級増俸して月俸百十円で迎えてくださいました。

そのころ、小学校の女教員で月給百十円というのは東京にもなく、私は全国一の高給取りになったわけです。一般に、神戸市は外国貿易港で財政も豊かだったのでしょう、教師の待遇はよかったです。それにしても、よほど今井学治先生の説明がよかったのではないかと想像されますし、また教育課長横尾先生の英断には感謝のほかありません。

こうして大正十四年四月一日、神戸市兵庫尋常高等小学校訓導として神戸に赴任、家庭科担任の教員として新しい活動に入りました。

この学校にちょうど一年間勤務しているうちに、教育課長横尾先生の新しい構想に基づき、神戸市に全国初めて男子高等小学校、女子高等小学校を尋常小学校と分離して設置することになり、男子の方は兵庫男子高等小学校、女子の方は明親女子高等小学校となり、私は明親女子高等小学校の方に配属されました。

独自の家事参考書を出版

明親女子高等小学校の初代校長は藤本先生といわれる方で、姫路師範学校の卒業です。女子の先生方は、家庭科裁縫に東京の渡辺裁縫学校や共立専門学校の卒業生の方がいましたが、あとでは皆共立専門学校卒業生だけになりました。食物の方は私がひとりで担当しました。私はそのほか、看護法、衛生、一般家事などをいま一人若い女の先生を助手につけて受け持ちました。

この神戸時代が、四十歳を少し越したくらいで一番よい年ごろだし、実際私の一生のうち教員としては最も充実感を味わった「花の季節」

だったと思います。それらの思い出を記録に残しておきましょう。

この神戸時代も横浜のときと同様、夜や日曜日、長期休暇を利用して料理研究を続けました。

そのころ勉強の場所として指導していただいた個所は、洋食の部門では(一)神戸のオリエンタルホテル(二)京都ホテル(三)みやこホテルなどがあります。

日本料理では(一)大阪の鶴屋、(二)京都松原の精進料理、(三)特殊の料理では祇園の芋棒等々であります。なかでも大阪の鶴屋には一番熱心に通ったものです。

中華料理は(一)神戸市南京町にあった有名中華料理店、(二)京都の広東料理店や中華鍋料理店等等で、横浜とはまた変わった趣向の料理研究ができました。

次に、私が教員としていささか誇り得る業績は、独自の家事科の教師用参考書を編さんし、刊行したことです。

私の主義とする家事科の指導のあり方は、文部省編さんの教師用指導書を使っていてはうまくいきません。そこで独自の教師用参考書と生徒の学習帳を出版したのです。

教師用の参考書は「学校を生活の場所としたる家事教育」と題したB5版三一九頁のものでした。

そのころ高等小学校の家事科の指導は理論はよく組み込まれていました。家庭で実際に行なうことと、ピッタリ合っていないことが多いようでした。これでは何のための家事科かということになります。そこ

で、私としては学校における家事科での指導と、家庭における実際とがピッタリ合うように学校を一つの大きな家庭と見立て、家庭で実際やるように学校において掃除にしる、整頓にしる、看護法にしる、家庭と思つて常々作業をさせる方針をとりました。

これが家事科指導における私の主義主張であります。

従つて、例えば授業で清潔整頓を教わつたら、校舎内外の掃除も自分の家をきれいにするのと同じ気持ちで隅から隅まできれいに掃除をする。便所でも、教室でも、廊下でも、壁でも傷めないように丁寧に、しかもきれいにする。また洗濯法を教わつたら、学校のカーテンでも宿直室のシーツでも、テーブルクロスでも何でも、汚れているものは自分の家庭のものと考えてきれいに洗濯しアイロンをかけるのです。

野菜も自給自足

食物の調理についても、自分の家庭でやっている考えで実習させる。野菜でも一から十まで店先の野菜を買わないですむ工夫をして、空地があつたら耕して種子を蒔き、朝の味噌汁の具になるくらいの野菜は自分で栽培する習慣をつける必要があります。

この野菜栽培の知識は家事科教育の一環でもありますが、また女性として植物や野菜の栽培は趣味としても味のあるものだし、第一自分で野菜を作つてみると農家の苦労もわかつてきて、野菜を粗末にしないようになり、家庭経済上非常に益することにもなるのです。

明親女子高等小学校における野菜栽培のことについては、ほほえましい思い出がありますので、もう少し書き綴りましょう。

私の家事科指導の趣旨から野菜栽培を是非実行しなければと思いたち、

さつそく校長先生にお願いして運動場の片隅を拝借、つるはし、唐鍬を揃えてりっぱな畑に耕しました。最初は夏野菜から始めました。キユウリ・カボチャ・ナス・トマト・青菜などです。

肥料は今日のように化学肥料はあまりありませんので、もっぱら下肥を使うことにし、肥柄杓や肥桶の用意をしました。しかし、皆都会の生徒ばかりですから下肥など扱った者は一人もいません。教師たる私が率先垂範で下肥を汲み出し、野菜にかけて見せます。すると数人の生徒は、鼻をつまんで逃げ出してしまいました。私がわざといやな顔もしないで、どんどんかけて行きますとまた数人逃げ出すといったぐあいでした。

次の割烹の時間のまず最初に「先生が下肥をかけるのを見て、鼻をつまんで逃げ出した人には栽培した野菜は使わせませんよ。その代わりに店先にさらしてあるしなびた古い野菜を使ってもらう。先生と協力して野菜作りに精出した人には畑にできた新鮮なつやつやした野菜で実習してもらうことにするから、そのときになって不平を言っても知りませんよ」と約束しました。逃げ出した生徒も、これでいくらかこたえたらしい。だんだん日がたって、ナスに美しい実が下がり、トマトが可愛い実をつけ初めると、生徒は「まあかわいい」とか「美しい」とか喜びの声をあげて、畑に入ってきては、草をとったり、ついには野菜の手入れなどを手伝い始めました。

さて、いよいよ夏野菜を使う料理の時間が参りました。私は畑でとれたつやつやしたナスと、店から買って来たしなびたナスを並べて「野菜作りから逃げた人は、このしなびたナスを使いなさい。野菜作りを手伝った人は自分たちで作ったものを使ってよろしい」と材料を渡したものですから、野菜作りにそっぽを向いていた生徒もついに詫びを入れ、それからというものはわれもわれもと野菜作りに精を出し、下肥えも厭がらずかけるし、除草や耕し作業も進んでやるようになりま

した。これらの作業は放課後課外活動として私の指導の下にやるのです。

高等小学校の生徒はかわいいもので、教師の指導一つで良い方向に向うものです。

校長の藤本先生も、畑を御覧になってびっくりなさいました。運動場の片隅のやせ地に、専門の農家でさえ顔負けするような野菜がりっぱに育っているのですから……。熱意ひとつで、こんなにもできるものかと感心しておられました。

このころは全国各地から明親女子高等小学校における家事教育の実状を参観に来られる方々が多かったのですが、その方々にこの野菜栽培の模様をお目にかけて、その出来栄えに皆感嘆されるのでした。

このことが県の学務課の方々の耳に入り、部長や課長がわざわざ見学に来られたことがあります。そして申されるに「県立の農学校は専門でありながら、野菜栽培というすぐ温室、温室といつてろくなものは作りきらん。明親女子高等小学校では素人の女生徒の手で運動場の片隅を耕している。みんなの熱意ひとつで、太陽の熱はこんなに見事な野菜を与えてくれる。」

農学校は、まるでなつとらん」といわれて帰られました。おかげで、私も鼻を高くしたものです。

このような実績がだんだん評判になり、確かに神戸市における家事教育は実生活に即したやり方であるとのこととで参観者は引きもきらず、私も神戸市の教育のため面目を施したつもりでありました。

次に私がいろいろと考えたのは、家事科の教具のことであります。教

具を整備するには、次の二通りの手段によるべきであると考えました。

公費で揃えてもらうもの

教師や先徒の創意と努力によって自主的に自分たちで揃えるもの

家事科のなかの衣・食・住・看護・衛生・育児・家庭経済の各部門のうち の公費によるものは何か の教師生徒が自分たちで揃えるのは何々がよいか、徹底的に研究分類して、たとえば教師や生徒の手に負えないミシン・アイロン・鍋・釜・コンロ・庖丁などは学校で揃えてもらう。しかし、その他の教師生徒の創意、工夫、収集努力によった方が第一勉強にもなるような標本や簡単な模型、資料等は自分たちで揃えることにしました。私は収集するのに特別強い趣味を持っていたものですから、教室いっぱいこれらの標本や模型を集めたものです。

神戸の鐘紡工場には綿糸、綿布の製作工程模型を作ってもらい、京都の西陣織工場を訪ねては実物標本を分けてもらい、大阪の淀川地区の各種工場を訪ねては家事に関する種々の標本を寄贈していただきました。淀川地区は随分広い地域に工場があちこちとありましたが、煙突目あてに足の悪い私が標本の集まるのを唯一の楽しみにして一日中よく歩いたものです。

地方で初めての全国女教員大会

小学校女教員会全国大会を神戸市で引受け、私はその運営責任者として大いに活躍しましたが、これも大きな思い出になっています。

神戸市の小学校女教員は二〇〇人ほどおられたかと思いますが、立派でそうそうたる先生が揃っていられました。そのなかで、私は最高の待遇を受け、赴任後一年半にして月俸二一〇円になりました。これは教頭に匹敵する待遇で、市教育課長横尾先生も大いに目をかけてくだ

さつたからでありましょう。そのようなことで、いつの間にか女教員の指導的立場に立たされ、ついに兵庫県女教員会会長に祭り上げられました。県女教員会議があるときはいつも議長をつとめねばなりません。が、割合いうまくやっていたとみえて、この会議の主宰振りを傍聴された市の課長さんから「中村先生の議長振りは県会の議長よりましだ」と冷やかされたことを覚えています。

このころ、教育界の組織されたものとして帝国教育会というのがありました。本部は東京です。小学校の男女教員はこの帝国教育会の研究発表会に全国から集まり、そこで研究の発表討論を行なうわけです。小学校女教員会はいつも東京で、しかも夏休みを利用して開催されていました。私が神戸に赴任してからは、兵庫県下の若いそうそうたる女子教員に研究課題を出し、神戸市でその発表会を持ち、なかで最も優秀と認められた先生二十人ばかりを選んで私が引率、中央の全国女教員会に出席するのです。研究発表では、東京対裡尺横浜対神一尺大阪対神戸といったような組み合わせで研究討論を重ねました。神戸はなかなか重きをなしていたのであります。

昭和三年の小学校全国女教員会のと きだったと思います。それまでこの大会は東京開催が慣例になっていましたが、地方開催もときには変化があつてよくはないかとの意見が出され、大阪はどうだろうとの提案がなされました。ところが大阪の代表の方から、来年の大会は請け合いかねますと断わられましたので、私は決断してそれでは神戸が引き受けましょうと約束しました。

全国大会を地方で開催することは大変なことです。神戸市の面子もあることですので、つまらぬ大会にしてはなりません。さつそく市女教員の幹部七、八人を選んで、幾回となく会合を重ね、どのように準備を進めたらよいかを研究しました。

まず第一番に資金を用意しなければと、東京、大阪方面の資産家、実業家の別荘地須磨、明石、舞子の浜に手分けしておもむき、寄付金を集めてまわりました。

教育課長の横尾先生も、地方で開催される第一回目の大会が神戸市で行なわれるということで「これはぐずぐずしてはおれない。東京や大阪をアツといわせるくらいにやるうではないか」と大張り切りで、私たちもおかげで活気づきました。

大会では、帝国教育会から理事の野口先生が出席され、帝国教育会からの出題、各県からの協議題について活発な討論、討議が行なわれました。

また現場の研究授業も見てもらおうと、神戸市内の三、四校を指定、そうそうたる女の先生の実地授業を行ない、その批評会も持ちました。

大会後の懇親会もなかなか豪華なものでした。第一に神戸市長から宝来丸という船を出してもらって大阪湾を遊覧、船上で市長招待のお茶の会を催す趣向です。一番目は私どもが集めた寄付金で全員を宝塚の歌劇に招待しました。そのほか、神戸港、造船所の見学、宿舍の手配など至れり尽くせりのもてなしをしましたので、全国の小学校の幹部の女教員の方々も大いに満足されるし、同時に兵庫県女教員会、神戸市女教員会の名声も大いに上がったのであります。

それとともに、今度は神戸市家庭科研究部編集の「学校を生活の場所としたる家事教育」はとたんに教育界の脚光を浴び、中央の帝国教育会の方で出版の世話まで引き受けようということになりました。

この参考書の編集は神戸市家庭科研究部となっていていますが、もともと

は明親女子高等小学校における私の家事教育の実情を著書にしたものです。これと生徒が用いる学習帳は各地から注文が殺到するようになりました。その範囲も関西を中心に、東は名古屋方面から、西は広島、岡山方面にまで及びました。

文部省の指導書があるのに、これだけの広範囲にわたり私が責任を持って出版した教師用参考書、生徒用学習帳が採用されたことはまことにうれしい限りでした。このため私は関西一円、四国、中国と家庭科講師として随分招かれたりしました。

すっかり上がったホテルの食事

神戸時代、私が女性なるがゆえに笑うに笑えない、自分で苦笑するような思い出があります。昭和四年十月一日付けで、私は兵庫県視学委員を拝命したのです。視学委員になって初めて私は県の学務部長や課長さん、それに姫路師範や御影師範学校長さんらといっしょに県下家庭科の指導視察に回りました。女性は私のほかにもう一人だけです。

さて、視察がひと通り済んで、神戸市のオリエンタルホテルで慰労会が持たれました。そのとき私は四十五歳でしたが、世間なれしないうぶなところもあつたのです。宴会が始まり、オードブル、スープと順序に従って料理が出ましたが、男性の偉い方々がずらりと並んでおられるなかに、女性はたった二人。恥ずかしくて恥ずかしくて食べる気持になれず、もじもじしているうち、料理はかつてに出されてはさつさと引かれて行きます。オードブルが引かれる。スープも口をつけないうちに引かれる。魚・肉皿もナイフ、フォークをちよつとつけただけ下げられる。この間、男性の方々はおいしそうにパクパク食べておられるのがうらやましくてしょうがない。とつとつ最後のデザート、コーヒーになってしまいました。

これで宴会はすんで解散。男性の方々は、さも満ち足りたように陽気に帰られる、ホテルから出て二人になってからの話がおもしろい。

「あなたひもじくないですか」

「ええ、おなかがすいてたまらない。このままではとても、今晚眠れそうにない」

「では、近くのうどん屋にでも寄って食べて帰りましょうか」

かくて話は決まり、うどん屋で素うどん一杯食べて、おなかをふとめて帰ったことがあります。

兵庫県の視学委員・家庭科の指導員ともある者が、洋式宴会の席上で料理によく手をつけきらないで、もじもじして上品ぶっていたそのころの私の心根がかわいくもあるし、やぼったくもあるし、おかしく思われてしょうがありません。

今から考えると、そのころの女性は、男性の前では一厘の値うちもないくらい弱い存在だったのでしよう。いま時の若い女性は男性の前でも堂々と振舞えるのでしようが、昔の女性はだいたいこんなところだったかも知れません。

神戸における活躍振りが教育界で高く評価されたらしく、一時私を小学校長にしたらという話が視学さん方のなかで出たそうです。教育課長の横尾先生からも、あるときその話が出ました。

「もしそうになったら教員組織が大切だから、どんな教員を揃えたらよいかそろそろ心組みをしておくように、また校長となる場合の教育方針等考えて心構えを作っておくように」ということでした。ところがそのころ兵庫県では姫路師範の卒業生でいて教頭止まりでなかなか校長に昇進出来ない先生方が多く、この方面から女の校長に反対する声が

上がった、このことは実現しないまま、やむを得ない事情のため郷里福岡にどうしても帰らなければならぬことになりました。

郷里福岡へ帰る

私が四十七歳(数え年)で再び郷里福岡に帰って来るようになったことについては、私立九州高等女学校の創立者であった釜瀬新平初代校長の病死が大きく左右しております。釜瀬新平先生は前に述べたように地理の大家で、私が福岡師範学校生徒時代に親しく指導を受けた恩師です。

この因縁の深い釜瀬先生が亡くなられる一年前、ひよっこり明親高等小学校に参観に來られました。私の活動状況を知られてたいへん喜ばれて申されるには「これは相談だが、中村さん。ひとつ我が九州高等女學校に來て家庭科の指導を担当してくれんか」とのことです。私は九州高等女學校とはどんな學校か、そのころはまったく知りませんので、はつきりした返事も出來ず「私もいつまでも神戸にいるつもりはありません。いずれは故郷の福岡に歸らねばならぬと考えています。その節は御校に御世話になることと思います。よろしくお願いします」と申しあげておきました。このとき釜瀬先生は上京の途中神戸に立ち寄られたのですが、時間の余裕もあるようでしたので神戸牛の専門店みつわに御招待しました。先生も御満悦の様子で、牛肉の料理やスキヤキをつついておられました。夜行の神戸発で東京に発たれましたが、私は駅まで見送りに行きました。これが先生との最後のお別れになったのです。

その後、お礼状も來ねば何の音沙汰もありません。福岡に歸郷したついでに先生を尋ねて行ってみますと、東京で発病されて帰宅されたまま御重病で回復もむずかしかろうとのこと。人間の因縁とはまことに異なるもので、神戸で御会いしたのが不思議な縁だったなあと悲しく思

われてなりませんでした。

その後間もなく、釜瀬先生が亡くなられたとの知らせに接しましたが、学校の都合で暇がとれず弔電を打ってはるか神戸の地から先生の御めい福を祈ったのであります。

この釜瀬先生が亡くなられたころは世の中一般が不景気のどん底にあっていっている時代で、私立学校に入学して来る生徒も少なく、福岡県下の私立学校はどこも一様に苦勞していたと聞いております。そこへもつてきて、創立者である初代校長がなくなるといふ二重の苦難に見舞われた九州高等女学校の窮状はどんなだったか大体の想像はつきます。

これを見かねて、釜瀬先生と親友の間柄であった安河内健児先生が福岡県視学の地位を退いてこの学校の態勢を立て直すべく二代目校長として就任なさる決心をされたとのことであります。

県視学といえば、当時教育界の目付役的存在で、私がかつて福岡県で小学校教員をしていた時代、県視学の安河内先生は切れ者のそうそうたる方であると聞いていました。その安河内先生が、釜瀬先生のあとにすわられるのですから、並々の覚悟ではなかったことがうかがわれます。

安河内先生は教員組織を新しく強化することを重視され、国語科には誰々、数学科には某々、地歴科は何先生との構想を持たれ、家庭科主任として私に是非就任してくれとお頼みです。釜瀬先生との約束もあり、いずれは九州高女に御世話になる覚悟はしていたものの、そのころは神戸で最もはなやかに活躍している最中で未練もあり、そうたやすく神戸を離れたくもありません。しかも、昭和五年の六月には増俸して一挙に百六十円の月俸になることになっていました。それでし

ばらく待つて下さいと再三、お断わりしたのですが、安河内先生の腹づもりでは、四月始めに一新した教員を勢揃いさせたい意向らしく、一向にこちらの言い分を聞いて下さる風もなく、電報を続けざまに打たれての矢の催促です。私の将来の都合、具体的にいえば恩給にしても六月以降に神戸を辞めればぐっと違ってくるのですが、恩になった方のことで無下にも断わられず、とつとつ腹をきめて神戸市教育課に願い出て退職することにしました。

ここに、神戸市明親高等小学校訓導を最後に、明治三十五年四月以降二十八年間にわたる公立学校教員生活に別れを告げ、以後私立学校に關係するようになったのであります。そのときの辞令

昭和五年四月二十二日

小学校施行規則第二百二十六条第二号後段により退職を命ず

この辞令をいただいて、最もはなやかな思い出の残る神戸をあとにし、寂しく九州高等女学校に赴任したのであります。

九州高女再建に努力

実をいうと、私が九州高等女学校への赴任の話が起こるまで、この学校があることさえ知らなかったのです。福岡の出身で、しかも母校の福岡師範のそばにありながらどうして九州高女を知らなかったのでしょうか。昔はそれほど私立学校を問題にしていなかったことがわかります。さて、九州高女に着任して校舎内を見てまわってがっかりしました。以前おりました神戸の明新高等小学校は高等小学校とはいえ、鉄筋コンクリートの堂々たるもの。特に、家事科の設備に至っては私が思うように設備をしてもらっています。調理室の実習台も至れり尽くせり。

ことに洗濯実習室では、洗濯槽は皆コンクリートで作り、部屋の一角に湯沸器をおいてコック一つひねればガスに火がついて湯が出る仕掛け、洗濯のときは湯でも水でもコックを回せば自由自在に出るようになっていました。もっとも、この設備をするときは市の横尾課長が中村先生はとんでもない理想的な設備を申し出られるので、金がかかって困る」とこぼしておられたとは聞いていましたが。………もっとも、後には神戸市の家事教育の進んでいることが世間に拡がり、毎日のように参観者があるようになると、横尾先生も自慢の種で悪い気はしていなかったようでした。

話が少し横道にそれましたが、そのような学校で家事教育の指導に当たってきているものですからがっかりするのも当然です。割烹室は板張りが古くなって所々床が落ちそうなところもある実習台は、木造トタン張りはよいとしてさびだらけ。廊下の天井を見上げると、松の丸太がそのまま見るのでちょうど農家の倉庫の感じ。私はこれはしまつた。もう少しよく調べておけばよかつたと思ったが、後の祭り。胸の中には何となく釈然としないわだかまりが残ってはいましたが、いまさら愚痴をいっても始まらないし、第一大人気ないと一通り校舎を見まわって帰ってきました。安河内校長先生は待ちかまえていたように、「中村さん、今日は釜瀬新平氏の御霊前にお参りしましょう。そして、あなたの待遇も決めておきましょう」とのこと。

待遇のことも安河内先生のことではあるし、つまらぬことはなされるまいと安心してそんなことにはまったくふれることなく、矢の催促の電報にせき立てられて赴任した私でした。

釜瀬先生の自宅に案内されて、釜瀬先生未亡人と私と安河内先生と三人だけで仏前に合掌しました。お茶を頂いていると、安河内先生が話しかけてこられました。

「中村さんは、神戸では月給百十円、百二十円・今回は百四十五円になつていたそうだが…。この九州高女は私立学校の一番苦しい時期、おまけに校長先生まで亡くなられてとても困っている。借金が十万円ばかり、これを返すのにも十年はかかる。生徒の入学も減ってきてどうしようかと思つているくらいだから、百四十五円なんかとても出せません。……………まあ、八十円に値下げして頂かねばならないでしょう。昔からおられるほかの先生方の俸給も皆値下げしているのですから、八十円で辛抱してくれませんか」

値下げも一級か二級くらいなら世間には例もあります、百四十五円から一挙に八十円とはひどい話です。そこで、私ものはつきりいいました。

「待遇の件は先生のことですからお任せして安心して赴任しましたが、八十円とは人が聞いたら笑いますよ。そんなに財政が苦しいんですから、無理はいけません。せめて百円ぐらいでしたら辛抱しましょう」「人には百円といつておいてよいじゃないですか。今の状況では八十円…」しばらく黙つて算盤をはじいておられました、先生は思い切つたように、「それでは八十五円にしておこう」と大きな声でいわれました。

私も気の毒になつてそれ以上無理をいう元氣もなく、それでは八十五円で辛抱してがんばりましょうと約束したのです。

月給の方はこんな調子でしたが、教員としての席次は上の方で家庭科の主任につけられました。安河内先生は私が以前福岡県内で教員をしていた時代に御世話になつた方で、その先生が何とか釜瀬校長亡きあとの九州高女を隆盛に導こうと腐心されている姿を見て、私も待遇などにこだわらず全力をあげて教育に専念、この九州高女の名声を高めるよう損得を度外視して働き続けました。

こうして五年たったある日、校長室に呼ばれました。一体何の用事だろうかと伺いますと

「中村さん、五年間一銭も増俸しなかったので、あなたも寂しかったろう。今日は久し振りに増俸してあげます」とおっしゃって五円増加、これで月給九十円になったわけです。

このころの九州高女の入学募集については、いろいろと思い出があります。

だんだんと九州高女にもなれ、私立学校の事情などもわかってきて疑問に思ったのは、

「どうして九州高女には生徒の集まりが悪いんだろう。あの偉い釜瀬先生の経営にしてはあまりにみじめな状況だが……」

私が赴任してしばらくたってあちこちに生徒募集に回りました。最初、近くの当仁小学校に行つて校長の伊藤先生に会いました。この方は、私が以前男子師範付属小学の訓導時代に知り合いになった方。生徒募集に参つた挨拶をしますと、先生がいわれるのに「中村さん、すまないが九州高女希望の者はたった二人しかいない。しかも成績が悪くて困っている」とのこと。

これで私もがっかりして、いろいろ考えさせられました。近くの当仁小学校の父兄が九州高女をきらうのには、何か以前九州高女のやり方にまずい点でもあったのではなからうか。

とにかく、成績の良い者は女子の場合、まず県立高女(現中央高校)に行くのはまあやむを得ないとして、第二は私立筑紫高女に行きます。同じ私立でも、筑紫の方はなかなか評判がよいのです。

「どしてこんなに違つのだらうか？」

私はやっきになつて生徒募集に回りました。

「私立は生徒をたくさん入れねば経営はうまくいかないんだから」と自分にいい聞かせて……。横浜や神戸では女教員として日本一の待遇まで受けた私でも、時世が変ればいたし方ありません。そこで自分の金を出して菓子箱を買い、夜分小学校の女の先生宅を訪問し、おなさけの先徒を一人でも二人でも九州女学校に送つて下さるよう「トトト歩き回つて頼んだものです」。

博多の冷泉小学校を訪問したときのことです。入試組担任の先生が入れ替り立ち替り会つて下さいました。例の通り、是非多数の生徒を九州高女に送つて下さいと頼みましたところ、男子の先生は皆「九州高女には希望者は一人もありません」との返事。たった一人、最後にお会いした若い女の先生が「私のクラスに一人おりますが、この生徒でよかつたら送りましょう」とのこと。そこでその子の成績を見せてもらつてびつくりしました。成績がビリなんです。私は神戸時代はなやかな教員生活を送つてきたものですから、侮辱されたと思ひムツとして「いくらなんでもこんな生徒は入れられません」と奮然として断つてしまいました。後日、このことが問題になつたのです。山田先生といわれ、早くから九州高女に勤めておられた先生が、私のあとその小学校に生徒募集に行かれたところ「先日、中村先生が来られてそんな成績の悪い子は我が九州高女にもいりませんとけられましたので、九州に行く生徒は一人もいませんよ」との返事があつたということが会議の席上問題にされたのです。

「劣等生だらうが何だらうが、何でも入れないと入学者が足らんじやないか」と、さんざん文句をいわれ、私はもう情けなくてくやし涙が出ました。

またしても、私の頭の中に疑問がかすめるのであります。この九州高女にしても、創立の歴史からいえば、私立筑紫とそう違わないのにと、うしてこんなみじめな状態なのだろうか。

こんな学校とは知らないで赴任したことが、急に悲しくなりました。こんなに九州高女の評判が悪いのは一体どこに原因があるのかを知るため、春吉小学校や警固小学校を尋ねて行きました。春吉には宮原校長、警固には奥園校長がおられたからです。両先生とも私が付属小学校訓導時代の同僚で気やすい方でした。両先生とも同じように

一、九州高女は非常に寄付金が多く、何かといえはすぐ寄付金募集がある。

二、小学校の若い先生を呼んで飲ませ食わせして生徒募集をやっている。

「こんな学校には私共が預っている大切な生徒は送られません。しかし、安河内校長が後継され、あなたや男子の優秀な先生方が赴任されたそうだから、これからは生徒も送りますよ。中村さん、しっかりがんばんなさい」とあとでは激励を受けました。

やはり教育というものは物質金銭をはなれ、誠心誠意生徒に対して愛の教育を行なわねば学校は発展するものでないことをつくづく感じさせられると同時に、

(一) 私立学校の通弊である寄付金募集はいけない。

(二) 本当に教育のため全心全霊を打ち込んで活躍するりっぱな教師をそろえ、充実した教員組織を作ること。

が如何に私立学校経営上大切なことであるかをいやというほど知らされました。

庭球部監督に

学校内の態勢もおいおい整い、安河内校長を中心として地歴、数学、美術、家庭科とおもだった幹部の先生方が一致団結して校内の空気刷新を図ったものですから、釜瀬校長時代重用されていた大酒飲みの有能な先生もそのために他に転職せざるを得ないはめになった方もありました。

この衰微した九州高女を振興し、発展させるために、具体的方針として次の二つのことがとり上げられました。

その一は補習教育を強化して学力をつけ、女子師範や福岡女専などへの入学率を高めること。

その二はどうせ学力は県立に劣るのだから体育を盛んにして、競技の面で優勝をかちとり氣勢をあげることであります。

補習教育の方は元気はつらつたる山田先生が責任を持たれ、自から進学組の学級主任を担当されて大いに鍛われましたので、女子師範への入学率もぐんと上がり、福岡女専にも堂々と多数入学できるようになりました。県立高女や私立筑紫と肩を並べるようになったのも、あまり年数の経たないうちにでした。

運動競技については、もう少し詳しく述べておきましょう。

運動競技の方も、山田先生統括のもとバレー部は体育科の堀井先生、バスケットが緒方(女)先生、そして庭球部は専門でもないのに家庭科の私が監督につけられました。

これら運動の選手は全員私が担任をしている家庭科クラスに入れて預り、平素からきびしい規律に服するようにし、また倒れて後やむ気概を養成するよう鼓舞するとともに、体力が衰えないよう食べ物にも気をつけたものであります。

バレー部には熱心な父兄の応援者の野さんといわれる方がおられたのを覚えていますが、何しろ監督の堀井先生が中心になって鍛われるのですから、めきめき強くなり、地元の強敵私立筑紫を破って県代表で明治神宮に出場すること数回、ついには全国優勝をなしとげて福岡県に九州高女ありとその名声をとどろかせたのであります。

庭球の方は、外部からコーチを二人ほどつけて私が監督です。練習のときは放課後にしろ、日曜、祭日、休暇中にしろ、頭に手拭いをかぶった私が審判台に上がったのそれこそ監督です。

猛練習の甲斐あって力もグングンつき、ある年は地方予選で八女津、糸島高女、福岡県立高女を破って優勝し、福岡県代表として明治神宮全国大会に出場しました。このときは二回戦で尾張高女と対戦、惜しくも敗れました。

ここで考えられることは、庭球にはズブの素人の私が監督をしてここまでよくまあ伸びたということなのです。

運動競技にしろ、何にしろ、指導者の熱意ひとつでは専門家以上の成績をあげるものです。要はその衝に当る人の熱意と迫力、努力と頭脳にあると思います。特に運動競技のような技術だけではなく、精神力を必要とするものにおいては、生徒の精神的訓練をなし得るような教師でなければ永久に優勝の栄冠はかち得ないことを痛感する次第であります。

運動の方もさることながら、九州高女に赴任して二年目、すなわち昭和七年には私の家事科教育の集録として神戸時代に引続き二冊目の著書として「郷土に立脚したる家事科の施設及指導の実際」二五〇頁を出版しました。

大成功収めたバザー

九州高女時代にまつわる思い出はたくさんありますがそのうち二、三について残しておきましょう。

先ず最初はバザーについてであります。

この九州高女のバザーは他の女学校のどれよりもすぐれ、私の自慢の一つでした。

よその女学校のバザーを見ておりますと、汁粉、すしや、おでんにしる専門の業者を呼んで来てこれに作らせ、学校ではこれをただ来客に売っていくらかの利益を得る程度のことですが、これは本当のバザーではなく、また教育的とはいえません。

本当のバザーは、生徒が平素学習し、実習し、会得した成果の中から品目を選んで、材料注文、製作販売、来客への接待一切を行なうところにあると思います。従ってその計画、準備は綿密に、周到に進められなくてはなりません。ここに私がやってきたバザーの例をあげることにします。

1. バザーに必要な製作部門、バザー券の売り捌き部門、来客への接待部門、食器の返納洗浄部門ごとに係を置き、生徒を各係ごとに割当て配置する。たとえば、誰と誰と誰は製作係、また誰と誰はバザー券係というように。

2. バザーで最も主役になる製作係は、そのなかでまた各品目別に班

に編成、生徒の分担を定める。たとえば、汁粉班は誰と誰とかいうように。そして、各班ごとに主任の先生を一人ずつつける。

3 . 材料注文は製作係各班で行なう。バザー券の売れた数は各品目ごとに大体事前に把握されるので、その材料数量をはじき出し、各班で食料品店に注文する。たとえば、汁粉班では二人分作らねばならぬとすれば、砂糖何十キロ、小豆何百キロとか。

4 . 製作係の各品目ごとの班では、製作する場所に必要な道具、器具をあらかじめ手配しておく。

5 . 当日のバザー券の即売、来客への接待、食器の返納、洗浄の仕方については事前によく訓練しておく。

以上を前もって充分習熟させておけば、生徒は自信を持っておもしろくやるし、バザーの運営もうまくいくはずです。

私は料理専門の教師ですから、当日は監督采配の方は他の女の先生に依頼して、私自身、助手と適当数の生徒をとっておき、一番難かしい鮎とカレーライスの製作担当に当たったものです。

鮎の方では調理室のそばの屋外に大型テントを張り、一斗釜を三個も据えて、飯を一斗ずつ炊いては自分で鮎をつけてやる。これを生徒は日ごろ教わった通り、お好み鮎と名付けて

握り鮎(東京式)

巻き鮎(大阪式)

箱鮎(神戸式)

を手際よく作り、盛り合わせて出す。福岡市内の鮎屋はそっこのけです。

東京式や大阪式、神戸式と一流の鮎を長期にわたり実地に学んだその結果を平素教え込んでいますから、作る生徒も自信満々。私自身、三

十数年間苦勞して学びとった鮭のことではあるし、鮭の飯にしろ、調味でもまずまず満点。好評を博し、すばらしく売れました。

また中村式カレーライスには前に述べたように、ビハリ・ボースのインデアンカレーライスにさらに改良を加えて、鶏の臓物のほかに玉葱、人参のミジン切りも加えているので、これまた市内の店で出しているカレーライスとは雲泥の差。これも人気がよく、ついには売り切れて困るくらいでした。

そのほか「雑煮」「おでん」「うどん」「汁粉」「サンドイッチ」等々、万人向きのものをおいしく生徒が作るので、二日間のバザーに入場者は一万人近くにもものぼり、利益も莫大な額に達しておりました。

九州高女では毎年十一月の上旬に、このバザーを催しておりました。年ごとに入場者も売り上げもふえて校長の安河内先生も大喜び。

この利益は学校の借金払いにも使われたのでしようが、私の方はその一部で調理実習用具を買ってもらっていました。またほんの一部は全職員慰勞の意味で慰安旅行費にあてられたようで、糸島方面に出かけたことを覚えています。

バザーについても一つ大切なことは、バザー券の前売りしておくこと。その前売りの数量をきちっとつかんでおくことです。九州高女のそのころは事務長に毛利先生がおられて、手配に抜け目はありませんでした。品名と価格を印刷した券を卒業生や生徒の手を通じて一般や父兄に売り捌きますので、バザーの前々日までにはきちんと各品目毎に売れた券数がわかるのです。これを製作係の方に連絡してください。いますので、製作係の各班では前売りの分に当日即売の見込数を加算して材料を注文し、製作にとりかかります。当日即売を少し控え目に見込んでおけば、品切れになるくらいで、作っただけは全部売れてし

まう。従って利益も多く、私はこの九州高女時代十五回のバザーを担当しましたが、いつも予想以上の利益を上げ、もちろん損をしたことは一回もありません。

私の考えでは、このバザーは女子の高等女学校以上の学校では年に一回ぐらいはやるべきだと思います。とにかくこのときは生徒も真剣です。

券を前売りした以上はいやがおうでも作って出さねばならないし、ぐずぐずしてはお客様が承知しないのですから、平素の料理の実習とは異なり、生徒も一生懸命にならざるを得ません。

私の体験では、バザー後は生徒の実習態度がよくなり、人間も変わるし、第一生徒が自信を持つようになります。少々授業に差支えはありますが、それ以上の効果があると思います。年に一回が無理ならば、せめて二年に一回ぐらいはやった方がよいと思います。

戦争の混乱のなかで

昭和十六年十二月八日、日本が大東亜戦争に突入しました。最初のうちは大勝につぐ大勝で、私ども教師にしる、生徒にしる、戦争の直接影響を受けることはなかったのですが、だんだん戦局が悪くなるにつれ、私どもの学校も急速に変わって行きました。昭和十九年以後は特にそうであります。

当時、私は寄宿舎の舎監を以前に引続き仰せつかっていました。このごろになると、学校の授業はなく、生徒は朝から弁当持参で筑紫郡にあった渡辺鉄工所(大きな兵器工場)に出かけ、弾丸造りの手伝いが日課になっていました。寄宿舎の生徒は毎朝五時に起床し、冬でも夏でも洗面をすませたら二列縦隊に並ばせ「一二一二」のかけ声でまず西

公園の光雲神社に参詣して戦勝祈願。それから帰って来て六時に食事をすませ、七時には工場に出かけるのがならわしになっていました。

夜、いやな空襲のサイレンが鳴ると、飛び出してすぐ前の学校の校庭に集まり、校舎の警備に当たります。解除のサイレンで寄宿舎に帰って来て寝るといったありさまで、舎監の仕事も容易なことではありません。

そののみか食物が欠乏してきて、野菜や魚、米麦の配給も思わしくないうようになってきました。米麦は卒業生のうちに特別頼んで何とか配給を受け、魚は湊町の漁業会社に嘆願して、ときどき特別の配給を受けましたが、一番困ったのは野菜です。

そこで校長先生にお願いして運動場の隅二個所を借り受け、これを耕して畑にしました。

ここに、ナス、青菜、カボチャ、キュウリ、トマトなどあらゆる季節の野菜を作りました。舎監たる私が先頭に立って、寄宿舎の生徒皆で野菜作りです。土地がやせているものですから、西公園の山に行うて腐葉土をとって来たり、よく馬糞拾いもしました。これが町の有名な話にもなったのです。人間の熱心さは恐ろしいもので、丹精こめて作った結果、野菜屋にも見られないりっぱなカボチャやトマトなどができ、生徒はいつもみずみずした新鮮な野菜を食べることができました。

忘れもしません。昭和二十年六月十九日夜の福岡大空襲。この空襲で、九州高女も火災に会い、学校はプールと寄宿舎だけを残して全焼してしまいました。このときの無念さ、悲しさは、今だに思い出しても涙の出るほどです。とにかく生徒が入る教室はまったくない状態になってしまったのです。それ以後、校舎が戦後完成するまで、近所のお寺

三力所を借りて間に合わせるまことにみじめな状況になったのです。

私はこの九州高女在職中三回表彰を受ける榮譽にあずかっています。今その実績を拾って見ますと、

1・昭和八年十一月十一日帝国教育会創立五十周年記念日に、我国教育功労者として教育功労賞を授与せらる。

2・昭和八年十二月五日右により、福岡市教育会より祝いの記念品を授与せらる。

3・昭和十五年十一月十日紀元二千六百年記念祭のとき、我国教育功労者として文部大臣賞を授与せらる。
となつています。

このような過分の表彰を受けるようになったいきさつについては、私はまったく知らないことでした。恐らく安河内校長先生が、月俸を随分切り下げられて赴任し、しかも何年間も増俸はできないのに、私が何ら不平不満を漏らさず教育のために全心全霊を打ち込んで働いていることに対するせめてもの感謝の気持ちから、関係当局を動かしてのことではないかと推測しています。

安河内先生という人はそういう方でもありませんでしたし、私自身も感激し、大いに感謝したしであります。私としましては、教育者はこれでいいんだと思っております。金銭にとらわれ、常に不平不満を持って働くのは、教育者の道にあらずと思っておりますから。

昭和二十年に、二代目校長の安河内先生が他界されました。安河内先生とは足かけ十五年間苦楽を共にしてやってきた間柄です。三代目校長として創立者釜瀬新平先生の実弟にあられる釜瀬富太先生が門司市の助役をやめて就任なさいました。

私は安河内先生が亡くなられたのを機会に、自分も九州高女から身を

引くべきであると決心しました。退職願いも再三提出しましたが、釜瀬新校長から「中村さんが辞めたら九州高女がまた弱くなる。あなたは留まって死ぬまで勤めてくれ」となかなか聞き入れてもらえません。仕方がないので、家族の者や親類の者に相談したら「それほどいわれるのなら二、三年辛抱した方がよかるう」ということになり、私も三年ぐらいと考えて勤めをつづけることにしました。

新校長の釜瀬富太先生は、実兄が創立された学校をさらにrippばな女学校にせずにはおかないとの一念で、燃えるような情熱で学校のことに取り組んでおられます。私もこの熱心さに意気投合して調子が出、安河内先生時代と変らぬ勤務振りだったものですから、新校長も非常に喜ばれて私を重用されたものです。

バザーで教室をつくる

昭和二十三年に入って間もなく釜瀬富太校長から呼ばれ、厳肅な態度で、中村さんに一つお願いがあるということでした。

「実は、校舎は戦災に会って全焼し、御覧の通りお寺を借りて授業を続けている状態です。このまま卒業生を送り出すのもかわいそうではない。せめて卒業生なりともしばらくまともな教室で授業して送り出してやりたい。冬の雪空で気の毒だが、例のバザーをやって木造二教室分の純益をあげてくれませんか」という相談でした。私も考えました。二月の寒中はまあ辛抱するとして、戦禍のため米は少なし、野菜はなく、甘藷でさえ思うに任せず、まして砂糖などは見たこともない時である。これは困った相談だなあとはいいましたが、本来私は学校のためなら身を粉にしても尽くす信念を持っていますから、断わる勇気もなく、「よろしうございます。何とか工夫してやれるだけやりましょう。」と答えました。釜瀬先生は大喜びで「ありがとう。ありがと

う。無理だろうが、どうか生徒のためやっていただきたい」と、話だけは簡単にきまりました。

さあ、それからが大変。私の苦労といったら、ひととおりではありません。請け合ったものの野菜は無し、砂糖はなし、食品は手に入らない。

米は、卒業生のうちで米屋をしている人に頼んで特別配給をしてもらいましたが、一番困ったのは甘味料です。大牟田市の三井染料でズルチンやサツカリンを作っていると聞いたものですから、そこへ行つてできるだけたくさん分けてもらいました。しかし、それだけではとても足りそうにありません。

今度は黒崎の化学工場に行つて、ここでもズルチン、サツカリンを分けてもらいました。砂糖の方は市内の菓子屋さんに一軒ずつ頭を下げて回り、少しずつ譲ってもらい、これで甘味料も何とか揃いました。甘藷は姉の保坂が大きく農業をやっているので、こちらに手配を頼みました。その他の材料も不自由ながらどうやら揃ったので、品目もお好み鮎「カレーライス」「おでん」「雑煮」「蜜豆」「汁粉」などにし、生徒に調理法を指導し、熟練させて曲がりなりにもバザーを開催したのです。

九州高女のバザーといえは、昔から定評がありましたので、時期が悪い二月の寒中というのに、もう一つは終戦後皆食べ物に困っていることも手伝つて八千人もの入場者があり、純益二十万円を挙げる事ができました。この益金で予定どおり木造二教室が完成、卒業生は卒業間ぎわに本式の教室で勉強ができたのであります。

釜瀬先生の御満足は一通りではありませんでした。職員会の席上で非常に喜んで披露なさいましたが、私にとっては雪の中に甘藷を集める

やら、砂糖を分けてもらいに歩くやら、まさに地獄の責苦のなかのバザーだったのです。

ところが、この職員会の席上で、一部の教員からバザーについての非難めいた言葉が出ました。

「汁粉の味も鮭の味もなつとらん。風味も何もない」

「あんなおいしくないバザーはかえって学校の恥さらしだ」
などというのです。

私はこのときほど、胸が煮えたぎり口惜しかったことはありません。

私はこの悪口、雑言をじつと聞きながら、胸のなかで考えました。「考えてもみなさい。終戦後調味料食糧品のない今の時代に、バザーを完全にせよというのが始めから無理な話。しかも寒中バザーするのがまちがっている。しかし、生徒のことを思えば校長先生がいわれるように不欄でならない。この私は横浜以来三十数年間、料理研究一途に苦勞してきているんだ。九州に帰ってからでも、休暇を利用して自費で料理研究に打ち込んできた。材料さえまとともに揃えば、こんなバザーぐらい何のことはない。というのに、わからない者は勝手に……ああ、こういう学校にはもう長くおられない」

九州高女に対する私の情熱が急速にさめていったのは、それからでした。

第四部教育の花ひらく

九州高女を去る

昭和二十三年の寒中バザーの一件以来、私としては何となく九州高女

に対する愛着が薄れてきました。それ以前から釜瀬富太校長先生に対し一部教員の排斥の動きがあっていた様子で、どうも学校内の空気が従前のように一致協力というわけにいかなくなってきたいました。

私としては、教師というものはただひたすら生徒に対する愛の教育を実践しておけばよいとの信念ですから、これらの動きに加担することもしないし、その必要もありませんでした。このような態度が反発を招いたのか、今度は私に対して追い出し工作が始まりました。こうなると、私もいつまでも九州高女に便々と勤める気はありません。もともと安河内校長一代限りで暇をもらおう決心をしていたくらいですから。

昭和二十三年十月初旬退職願いを出して一時、養子久雄君が勤務している宮崎県の塚原(上推葉の下流。久雄君はそのころ日本発電電の水力発電所技師)に落ち着き、静養かたがた将来の方針を考えることにしました。ひとつには福岡に居ると教え子や卒業生が押しかけて来て、もう一度教壇に帰れとせがまれ、学校との間にいやな抗争が起きるのを避ける気持ちからでもありました。

昭和五年四月以来十八年有余、苦労を共にした九州高女とも訣別したのであります。六十四歳(数え年)の秋のことです。

中村割烹女学院創立

宮崎県の山奥でゆっくり静養しながら、いろいろと将来の構想を練ってみました。このころは敗戦直後で食糧には最も不自由していた時代です。「この少ない食糧をうまく使いこなして、おいしく、しかも栄養のある料理を作り得る婦人は非常に少ない。私は幸い健康には恵まれている。自分が教育者として最後の働きを全うするには、横浜時代、神戸時代、九州高女時代を通じて二十年間にわたる料理研究の成果を生かすべきである」と思い至りました。息子夫婦に相談すると大賛成

でした。それでは、ここでもう一ふんばりしようと宮崎を引き上げて福岡に帰って来たのです。

さつそく校舎を何とかせねばと、そのころ福岡市議会議員をしていた異母弟の中村七平氏に頼んで、やっと唐人町公会堂を借用することが決まりました。昭和二十四年新春早々のことで県の方に中村割烹女学院設置認可申請を出して無事認可になり、その年の四月から開校したのです。これが、私学経営に乗り出した第一歩になったわけでありま

す。

このときの陣容は、私が院長、事務会計には師範学校の後輩末松みさをさん（現中村学園女子高校長末松先生のお母さん）、助手には九州高女時代の教え子山崎さんと島村さんの二人、というほそぼそとしたものでスタートしました。

しかし、私が料理学校を開いたと聞いての応援者は多く、これも師範時代の後輩の原小学校教頭の郡司先生や、馬出小学校教頭の大野先生などは開校の宣伝ピラを配布するのに大活躍をなさるなど、師範同窓生の方々のこのときの応援は私として一生忘れられないことでありま

す。

このころ、市内には江上トミ先生が料理学院を平尾の方に開いておられたくらいで、ほかにはなかったと思います。中村割烹女学院の看板をかけていよいよ先徒募集を始めますと、入学者が何と四百五十名も集まる大盛況です。小学校の先生方や有名な御婦人方も多数おられました。

本格的な料理学校としては市内唯一といわれたかも知れませんが、現在のように至れりつくせりとはいえません。しかし、実習の調理台だけは十二台私の設計になるものを揃え、当時としてはまずまずの出発

だったのです。とくに、物資の少ない昭和二十四年ごろでしたから。とにかくスタート早々四百五十人もの入学者がありましたから私も意気盛んで、料理の指導にも熱が入るし、生徒さん(といっても上は五十歳ぐらいから下は十七、八歳まで)も熱心なものでした。

うれしかった姉の心づかい

この中村割烹女学院を創設するとき、私の姉保坂タミの陰ながらの応援を記録に残しておきたいと思います。

九州高女から頂いた退職金八万円はいつの間にか創立の費用に飛んでしまい、調理台やいろんな器具の購入資金がありません。そこで五十万円を福岡無尽(のちの福岡相互銀行)から借りるようにしたのですが、どうしても担保がいるとのこと。もともと金とか財産に余り関心のない私には不動産などあるはずもありません。この担保のことを末松みさを先生に話したら、それは保坂の姉さんに頼まれたらどうでしょうとのこと。さっそく姉に相談したところ「まかせときなさい」と、ころよく引受けてくれました。間もなく、銀行から五十万円の金が出ました。いろいろの支払いをすませ、私はそのま、五十万円の金がどんないきさつで借りられたか、気にも掛けず忘れてしまいました。

後日といっても数年経ってからそのときの真相を知り、感謝の念で頭が下がった次第であります。その裏話とは……………

保坂の姉があるとき「まかせときなさい」と大見得を切ったあとが大変だったそうです。まず主人保坂国吉名儀の家屋敷の権利証書と実印をこっそり持ち出し、銀行の係員を呼んで借用証書その他の手続きをすませたのですが、これはあくまで主人や家の者には内緒ですから近所の家の座敷を借りての作業です。ついで銀行員が担保物件の評価に came ましたが、これも家のまわりをうろつろされてはバレてしまいそう

なのでなるべく遠くの方からそれとなく調べてもらおうなど、随分神経を使ったようです。

このことは、割烹女学院が繁盛してもうこれならば大丈夫というところになって主人にもわかり、笑い話になったそうですが、創設のころは海のものとも山のものともつかない試みであるだけに、随分思い切った冒険だったわけです。

笑い話ですまされるようになって、姉に「よくまあ、思い切って助けてもらったが、そのときの気持は」と聞きますと、姉は「あたきはこの料理学校はあたると思うとった。日本人がみんなひもじい思いをしとる時じゃけん、食べ物の仕事はこれはよい思い付きばい。それにハルしゃんのことじゃけん、必ず成功すると信じとった。ひよっとうまくいかんときは死んで、主人や家の者にはお詫びするつもりじゃった」と、カラカラと笑いとはしてしまいました。

苦勞して育った姉は、洞察力の鋭い腹の大きい女性だったのです。まったく頭が上がりません。

次ぎにこんな笑い話もあります。

学校の方も万事好都合に運んでいたある日、突然税務署の方が来られて帳簿を見せてくれとのことでした。私は教えることで頭が一杯で、税務署のことなど考えたこともありません。第一、学校は税金がかからないぐらいにしか考えていない世間知らずでした。事務会計の末松さんも福岡市の優秀な女教員だったので、その方はとんと無知。みんなのが二人揃っているものですから、帳簿はなっております。金銭出納は書き込みではあるのですが、まるでメモ帳です。随分長いこと帳簿を調べていた税務署の方も、しまいにはついに怒り出して「これは何が何かさっぱりわからん。見込みで税金をかけますよ」といつ

て帰ってしまわれました。

こちらでも経営状態がどうなっているのかよくわからないで、とにかく支払いだけはきちんとやっているし、銀行にも不都合なく返っているから、それでいいんだくらいの考え。教える方は専門ですが、経理や財政のことになるとまったく弱かったです。後日、税務署から税金納付書を送ってきたのを見ると、ちょうどいいくらいに掛けてあったようでした。

このころの生徒さんは多種多様で、割合に年配の人が多く、生徒さんの中から世話人が出て忘年会とか謝恩会とかよく世話が行き届き、非常に楽しい思い出になっています。

開校二年目にはいよいよ入学者もふえて、一挙に七百五十人近くも入る盛況ぶりです。

こうなると唐人町公会堂では手狭になってきました。そこで、会計の末松さん、姉の保坂や異母弟の中村七平氏と相談のうえ、校舎を新築することにいたしました。

土地は地行西町の菊池さん所有のもの二百二十坪を五十五万円で譲ってもらい、校舎百五十坪約三百万円は勝呂組の請負で工事、昭和二十六年夏に完成したのです。

同年九月から唐人町公会堂を引き払い、この新築校舎で授業を開始しました。このときも福岡無尽から三百万円借用しております。

発展する割烹学院

この地行西町二二番地の新校舎は、当時としてはモダンな建物で、ア

メリカ進駐軍人が日本にも料理学校のしやれたのができたところ、アメリカの新聞にもわが中村割烹女学院が紹介されたと聞いております。

アメリカ進駐軍といえは、こんな話があります。

あるとき、通りがかりのアメリカ進駐軍人が数人つかつかつと学校の中に入って来ました。彼らにしてみれば、日本のきれいなお嬢さんがたくさん集まってガヤガヤいっているのが外から見えるものですから、何事ならんと入って来たものと思われます。

ただ見学するだけならよかったです、美しい日本料理特にはなやかな鮭料理を見ると、たまりかねてか無断で手にとってムシヤムシヤ食べ始めたのだそうです。生徒さんは悲鳴をあげて院長の私のもとに、何とかしてくださいと訴えて来ました。……

私も進駐軍のことではあるし、無作法と叱るわけにもいかず、致し方ないので、別室につれて行きました。

「この学校は、結婚前の若いお嬢さん方や」家の主婦の方々が戦後の日本の食生活をいろいろと研究するため、授業料や材料代を乏しい家計の中から出して皆勉強に来ていられるのです。できあがった御馳走は自分で試食して味のぐあいを調べたり、家に持って帰って家族の者に食べさせる大切なものです。だから、みだりにつまみ食いされては生徒が困ります。見るだけにしてください」

と頼んだあと、彼らに聞きました。「ところで皆さんはおすしが好きですか」

「日本の鮭、大好き」

「それでは、明日私が腕によりをかけて美しい、おいしいお鮭をいろいろ

る作つてあげますから、また学院においてなさい」

と申しますと、みんな喜んで「では、また来ます」といつて帰りました。

ああいつて帰つたものの、はたして来られるかなと半信半疑で、握り鮓、二重巻鮓、箱鮓を作り、鉢盛りにして待っていると、昨日の顔ぶれ以外の人までつれて愛敬をふりまきながら彼らはやって来ました。私もつられてうれしくなり、いろいろ親切にもてなしていますと、一人の軍人が「僕の国もにも、あなたのような年ごろの母が待っている。子供も二人いる。近い中に引き上げて本国に帰ることになっているから、今日のお礼にアメリカの料理の雑誌や調味料をお送りしましょう」と、まるで友だち同志のような雰囲気になってしまい、鮓をみんな食べつくして賑やかに帰って行きました。

その後このことは忘れともなく忘れていたのに、しばらくしてアメリカから荷造り一個がひょっこり到着、そのころ日本では珍らしい洋胡傲、パプリカ、ニッケイ類が詰めこんであります。わずか鮓ぐらいのことでこんなに丁寧にされて恐れ入るとともに、アメリカ人のおおらかさ、信義の厚さに感心しました。

このころの割烹女学院の生徒数は、本科、研究科合わせて一千名を突破する盛況で、院長の私がほとんど一人で、昼、夜二回に分けて料理の示範、指導を行ない、これに助手六名、事務会計は末松さんほか一名、用務員二名の陣容でした。いかによく頑張っていたか、想像がつくと思います。

このころから少し年代は遅れますが、昭和三十年三月二十日中村割烹女学院の卒業式における私の式辞がありますので、ここに再録いたします。私の料理学校経営の考え方や当時の日本の状況など思い起こす

のに参考になれば幸いです。

中村割烹女学院第六回卒業式式辞

春雨そぼ降る静かな日に本学院第六回卒業式を挙行いたします。当たり、我らの杉本県知事殿を始め多数来賓各位の御臨席を恭うし、かくも盛大に式をあげ得ますことは、まことに歡喜に堪えない次第でございます。

思うに、我国が終戦後新たに独立国家として国際社会に伍するに至つてより最早や三周年の春を迎えました。が、国内の経済状態は相変わらず不振の一途をたどり、従来五大強国の一つとして誇りを持ち八紘一宇を夢想していた大和魂はどこへやら影をひそめ、自主自立の経済に乏しい我国では未だに外国依存の、見るに忍びないものがあります。ところで国家の素因をなすものは一家庭なのでありますから、家の消費経済のやりくりを背負う私ども女性は、直接間接に国の経済の不振についての責を負わねばならぬと痛感いたします。

特に昨今の如く、社会情勢が不景気のどん底に落ち、切りつめた生活態勢をとらねばならぬ際には、一家の主婦は衣、食、住のうち特に食生活に万全の注意を払い、新鮮で栄養豊富な食品を獲得するためには、生産の労も敢て惜しまないという立場で野菜も栽培しなければなりません。また最も廉価で買い入れる工夫も必要であります。そして、最少限度の食品を使つて最大限度の栄養価値を発揮するよう、献立、調理に細心の考慮を払うのはもちろん、燃料の節約や一切の無駄を排除して、いつも愛と誠意のこもった保健食を与え、和気あいあい、身体的にも、経済的にも、健全なる家庭の育成に邁進することが女性の本分だと考えます。

本日、御卒業の皆様は数多くの女性の方々に先駆して本学院に御入学

になり、清節の徳を研ぎつつ、この食生活の研鑽に一年一日の如く精進されましたことは、指導者と致しまして感激のほかございません。とくに若い奥様のなかには、赤ちゃんを背負い、あるいは一人、二人と幼な子の手を引いて、一日も欠かさずつとめられた方さえおられます。

かくて今日の晴れの式場に於て、皆勤賞を授けられるお方が二〇四名、その他精勤賞、努力賞、早納賞、模範賞等を授けられるお方、受賞者総数七〇五名、賞品が御覧の通り山と積まれているのを見て、皆様がいかに真面目に、真剣に努力されたかということがうなずかれるのであります。

さて、本学院の姉妹校として建設いたしました福岡高等栄養学校は、新学年度の入学志願者が、その数に於ても、その優秀さに於ても、開校当初の昨年に比し倍加いたしています。近き将来には栄養短期大学への昇格も計画している関係上、教師の陣容も九州大学、学芸大学その他各種専門の大家をもつて組織されております。本学院卒業生三千名に対しては長期休暇を利用して再教育講習会を催し、日進月歩の文化の進展に遅れないよう指導をつづけたいと考えます。皆様も学校の意のあるところを諒とせられ、振るって御参加下され、健全家庭建設のため御奮闘あらんことを希望いたします。以上を以て、式辞といたします。

昭和三十年三月二十日

中村割烹女学院長 中村ハル

学校法人中村学園の設立

福岡県に各種学校連合会というものがありません。わが中村割烹女学

院もその会に加盟していました。昭和二十七、八年ごろの会長は高山平一先生で、非常に世話の行き届く方でした。

私立学校経営についてまったく素人といってよい私どもは、何かというところと高山先生の意見を聞いたり、親切に指導を仰いだりしたものです。

この方があるとき、全国各種学校連合会長の牛窪先生・事務局長の渡辺先生と一緒に学校に來られました。

「中村さんはながいこと料理とか、栄養とかを研究されていると聞いています。この料理学校も非常に盛況で、頼もしい限りです。ここで一つ栄養学校をつくって栄養士の養成に当たったらどうですか。いま九州には栄養士の養成校は三、四校しかなく、とても足りないのです。幸い、料理学校はすでにあるのだし、前の空地(地行西町の割烹女学院の道を狭んで東側に二〇〇坪程度の空地がそのころありました)を買い足して、普通教室を二、三作ればいいんですから」

と、すすめられます。私も大いに心動かされるものがありました。と、いいますのも、栄養のことは永年勉強してきたことでもあるし、また料理の指導をするにしてももう一段深いところの栄養の分野にまで入らないと、駄目だというのが従来からの私の主義だったからでもあります。

それにもう一つ大きな動機となったものは、この地行西町の中村割烹女学院の横を日系米人の軍人がよく通っていました、その体格の素晴らしいことに驚かされました。これは遺伝とか、体質とかではなく、やはり栄養が一番大きな原因ではなかるうか、今後は栄養のことを考えなくてはいけないと思いつたからでもあります。

さつそく関係者にいろいろ指導を仰いで、前の空地に校舎を建て、そ

の程度でよいものかどうか設計までいたしました。とてもそんな簡単なことでは栄養学校にはなりません。

それでは新しく土地を物色しようということになり、藤永さん所有の市内上中浜町一丁目、田、七二七坪を坪当り四千円で譲ってもらったことになりました。これが、その後の栄養短大であり、現在中村学園女子高校の水仙寮になっているところでもあります。

このころ、県からいろいろ指導を受けましたが、そのとき栄養士の資格を与えるような、社会的に見てきわめて公共性の強い栄養学校のよくな学校の経営は、学校法人で行なうべきであるとの結論に達し、ここに初めて学校法人設立の準備にとりかかったのであります。

当初の理事の顔ぶれは、次の通りでした。

理事長 中村ハル

理事 広畑竜造(当時九大医学部生化学教室主任教授)

森田武雄(味の素株式会社福岡支店長)

郡司秋生(女)(原小学校を教頭で退職され、その後福岡

高等栄養学校総務課長に就任)

中村久雄(私の養子で当時九州電力技師)

こうして昭和二十八年十二月、福岡県知事より学校法人中村学園設立および福岡高等栄養学校の設置認可が下りたのであります。

さつそく第一回目の生徒募集にかかったところ、やはり社会的要求も強かったとみえ、定員百名のところにも百五十数名の応募者があり、そのうちから百十名余に入学を許可しました。このころの入学生は現在と違い、高校卒ばかりではなく、旧制中学卒もかなり居て、年もまちまちで実に多種多様でした。この第一回卒業生のなかから現在料理学院副院長の中村シズ子や短大の江上一子先生、その他そうそうたる人

材が多数出ているのであります。

学校の方はなかなか好調なスタートでしたが、資金の方はとても苦しく、中村割烹女学院の私の手もことから常時応援しなければ給料も払えない状態です。これが積み積みもって一千万円になりましたので、これは寄付することにしました。

この福岡高等栄養学校は昭和二十九年四月開校したのですが、最初から私の持論である制服を制定しております。

授業の方は広畑先生の御世話で九州大学から栄養学、食品学、公衆衛生学のそれぞれベテランが担当され、私も校長をしながら調理実習を自ら担当し、生徒の訓練に当たったものです。

中村割烹女学院の方と福岡高等栄養学校の方と両方掛け持ちでしたから、なかなか忙しい毎日でした。

この学校法人中村学園の設立と福岡高等栄養学校の開校を祝して、昭和二十九年五月十七日記念式典を催しました。これがその後、中村学園の創立記念日になったのであります。

待望の栄養短大

さて、この福岡高等栄養学校を経営し、また校長として実際教育に当って生徒をみると、何となく品性に劣るところがあります。やはり職業教育だけにかたよっては駄目です。一般教育も取り入れた総合教育を施さねばいけないと、ひしひしと感じました。生徒の方も同じ二年間勉強するのだったら、短期大学に昇格できるようにして下さいと強く希望してきます。

私もすでに栄養学校があるのだから、これを短期大学に昇格するくらいのごことは簡単なことだろうぐらいに考えて、申請書の作製を郡司先生にお願いして細かく研究はしませんでした。

ただ一度、昭和三十一年の六月ごろ文部省に行き係官にお会いして、実はこういう事情で短大をつくりたいと思いますのでよろしくお願ひしますと、事前あいさつに行っただけ。しかも、そのとき係官の方も軽く考えられてか「よろしうございます。しっかりやんなさい」と激励されるものですから、「こちらは社交辞令とは露知らずもう認可されたような気持ちになっていました。

ただこのときわかったのは、校舎は福岡高等栄養学校のままでは不足で、相当これに継ぎ足し増築せねばならないことだけでした。

いよいよ九月下旬になり、書類もできたというので上京することにしました。書類の表紙には、福岡高等栄養学校を短期大学に昇格するので「中村栄養短期大学昇格認可申請書」と大威張りで書きました。

文部省のこのような大学や短大の新設の場合の書類の提出締切は九月三十日までと聞いていましたので、たしかその三、四日前と記憶いたしますが、文部省の技術教育課に伺い、村越係長に書類を提出しました。ところが、村越係長は書類を見るか見ないうちに、ひどくおこりはじめられたのです。

「この書類は何ですか。いやしくも短大一校つくるつうのつうの、こんなお粗末な書類では内容を見なくともわかっています。第一、すでに表紙の申請が違っているではないですか。あなた方は昇格と普通に通っているかも知れないが、文部省の方からいえば、今の栄養学校を廃止してその校地、校舎を活用して短期大学を新しくつくる解釈にな

るので、すから、あくまで中村栄養短期大学設置認可申請になるのです。もう少し、ものの分かった事務官を入れてきちんとなさい。とにかくこの書類は受取るわけには参りません。持って帰って下さい」

私も簡単に考えていたものですから、まさにこのお小言は青天のへきれきです。しかし、この場は何とかつくるわねばなりません。「本当にすまんことをしました。素人ばかりでやっているものですから。まだ締切りまで三、四日ありますので、先生の御指導を受けて書類を作り直し、持って参りますからよろしく御願います」

と、平身低頭で引き下がりました。

さあ、それからが大変です。旅館に帰り、かねて懇意にしている檜橋渡代議士に相談いたしますと、それは僕の秘書がその方の知識は持っているからそれに加勢させようとのこと。地獄で仏とはこのことです。文部省の指導を仰ぎながら、どうやら受理できる体裁の書類に作り直し九月三十日提出、一応申請受けだけは完了しました。そのとき文部省の係官が言われるには「これからはほんものですよ。今日のところは書類上のことだけですが、これからは書類の内容と実際との審査を行なっていくきます。教員の資格審査でまた内容が変るかも知れません。そのときは書類の一部差し替えは構いません。十月一杯によく検討されて、もし差し替えがあれば十月三十一日までは構いません。今まで短大の認可になったところでは、事務員の一、二名倒れるのは珍しくありません。それほど認可はむずかしいんですよ」

と、親切に注意して下さいました。

飛行機の中で申請書の糊を乾かす

近ごろは、短大や大学の新設の申請も数多くて文部省の指導も形式的

になっっているようですが、昭和三十一年ごろはせいぜい全国で短大新設七、八校程度で行き届いたものでもあり、時間的にもその点ゆっくりしていたような気がします。

私は帰りの汽車の中で、これはとんでもない難事業に手をつけたものだ、しかし絶対成功せねばおかぬと決心したものです。

さて、福岡に帰って来てこのような短大新設に深い知識と経験を持つた人がいるだろうかといろいろと考えをめぐらしているとき、ふと靈感のようにひらめいたのは福岡大学の河原由郎先生(現福岡大学長)のことです。

福岡大学には、かつて私が九州高女時代仕えていた安河内校長のお嬢さんの婿で、教授をされている河原先生がいられる。福岡大学は近ごろめきめき発展しているので、このようなことに詳しいのではなからうか。

そこでさっそく連絡をとり相談しましたところ、御加勢するのは当然ですが、私だけでは本務があつて、しょっちゅうというわけに参りませんから、私が昔から知っている桜井匡先生も加えて下さいとのこと。よかろうということ、私と河原先生と桜井先生と三人で話し合い、この際専門の事務員を置くことにし、これにはちょうど桜井先生の息子さん敬君がよいということになりました。しかし、経営のことや資金面のこと、建築のことについては内輪の者でないとわからないというところで、この方面のことは養子の久雄君が九州電力大分支店の係長をしているが、時々福岡に帰って来て手伝ってもらえばよろしかろうということになりました。

格式ばったものではありませんが、世間流にいえば設立準備委員は私と河原先生、それに桜井先生と桜井敬君、養子の久雄君で構成し、こ

れに福大から課長さん一人にときどき加勢してもらおうという構成です。河原先生や福大の事務の方は、昼間は本務の都合で動けませんので、打ち合わせばもっぱら夜間になり、ときには随分遅くまで御迷惑をかけたものです。この準備委員会の事務所を、地行西町の中村割烹女学院の二階におきました。

これが十月初旬のことでした。これから本格的な短大づくりの業務が開始されたといってよいでしょう。九月三十日に何とか文部省に受理してもらった申請書の内容を再検討してみるととても短大の認可どころではないこともはつきりしました。それでは根本的にやり直そうと、教員組織の折衝は桜井先生に担当願い、校地、校舎の増設の方と経営の方は久雄君の担当。逐次計画が具体化して行くのと並行して、認可申請書も整備されて行きました。こうしてこれならばまず大丈夫だろうと思われる申請書が完成したのが十月三十一日です。製本して糊の乾く時間もなく、私と久雄君と桜井敬氏の三人が飛行機に飛び乗り、飛行機の中で糊を乾かして文部省に届けたときはホッといたしました。当時は、今のようにジェット機ではなく、飛行機が遅れはしないかとハラハラしたものです。

当日は、書類を以前提出したものととの差し替えだけにし、さて翌十一月一日文部省に出頭し技術教育課の係官に内容を点検してもらいましたところ、これならどうやら脈がありそうだとの批評でした。

その後審議会にかかり、また実地審査も受けいくらか内容の変更もありましたが、結局は認可になったのであります。

ときに昭和三十二年三月十五日のことでした。ここに中村栄養短期大学の誕生をみたわけで、これが現在の中村学園短期大学食物栄養科の前身なのであります。

このとき私は、大学設置審議会、資格審査委員会で調理理論、調理技術教授「可」の判定を受けております。過去の私の経歴や努力が認められたのでしょうか。

この短大の設置認可については、まったく苦労の連続でしたが、昭和三十三年四月開学後は入学志願者も多く順調な歩みを続けてきました。

これも学内諸設備は小規模ながらもキッチンと整えましたし、教員組織も九大、福大の御協力を仰ぎ、優秀な先生方が揃われたこと、また後援会の御援助それに学生が私の教育精神をよく理解して独特な中村栄養短期大学の校風を育ててくれて社会のよき評価を得たことによるとありがたいと思う次第であります。

昭和三十三年十一月一日に短大の開学式典と校舎の落成式を挙行しました。そのときの私の式辞の原稿を再録しておきます。

中村栄養短期大学開学式ならびに学舎落成式式辞

新興日本の隆盛を計るには何はさておき、国民の健全な身体、健全な精神に侯つところ大であります。而して、その健康の増進を図る方途は種々ありますが、日常の栄養食問題と公衆衛生のこの二問題はその中核をなすものでありますから、一家の食生活の衝に当たる女性はもちろんのこと、男性の方々にもこれが認識を深からしめねばなりません。特に国家が少国民の体位向上を目指し多大の国費を投じて実行しつつある小学校給食や保育所の給食、食事療法に侯たねばならぬ病院、あるいは集団給食を施す自衛隊、ならびに大工場の寮等では、栄養学の知識、公衆衛生に明るく、かつ科学的調理の技術に堪能な栄養士を配置して万遺漏なきようにせねば、所期の目的を達成することは到底出来ないと考えます。

不肖、私、女子教育に従事すること五十有余年。就中、食物科の研究に専念すること三十五年間、この貴い体験を生かし、食生活の向上、環境衛生の改善に力を注ぎ、国民の体力増強と家庭の消費経済の合理化を促し、ひいては国家の富力にいささかなりと貢献し、以て教育者としての最後の使命を果たさんと決意し、終戦直後食糧事情が混沌としたる際、昭和二十四年三月中村割烹女学院を開設、これを基盤に昭和二十八年十二月福岡高等栄養学校を設立、翌昭和二十九年四月栄養士養成施設として厚生大臣の指定を受けました。

爾来、その道の大家や熟練な栄養指導者諸賢を招聴して御協力を仰ぎ、優秀な栄養士の養成に真摯な努力を続けて参りました結果、世間の信望も高まり、卒業生の就職も九十彩という高率を示し、開校三年目には定員の三倍の入学志望者をみるに至りました。

しかるに第一回、第二回と送り出した卒業生の成績より考えまして、単なる栄養士養成の職業教育では完全なる人格の陶冶、高度の教養の涵養に欠陥があることを痛感し、いつそ栄養短期大学として専門的必須科目の研鑽を今一步深め、かつ一般教養科目として倫理学、哲学を課して日本国民としての高度の教養を修め、以て教育の充実を計らんと、昭和三十一年九月栄養短期大学設置申請の手続きをとりました。さいわい文部省当局を始め郷土の知名有志の方々のなみなみならぬ御助力によりまして、翌三十二年三月十五日文部大臣の認可を受け、四月開学して今日に至ったものであります。

しかし、かくなるまでの私の踏んだ道は実にイバラの道で、決して坦々たる道ではありませんでした。この苦しみは、教育者としてはまことに貴い苦しみであったと考えます。今日の祝いに、厚生省から御臨席下さいました水長事務官殿は、その当時格別の御厚意を受けた御方で、改めて厚く御礼申し上げます。

何と申しても開学当初のことゆえ、設備万般未だ不十分な点は多くあります。一応軌道に乗りましたので、この好季節に日ごろ一方ならぬ御厚意、御支援を仰ぎつつある方々に感謝の意を表する意味に於て、開学式典ならびに学舎落成式を執り行ないました次第であります。

さて、前途の計画は遼遠であります。まず第一に二九年の栄養短大で充分の好成績をあげるには、その前身校たる高等学校教育と密接な提携を最も必要とする関係上、大学の予科としての高等学校併置の件も考慮せねばならぬし、また一般教養科目の実施もただ単に空理空論に止まらず学生の實習実行に訴えてこそ始めて効果を發揮するものでありますから、これまた實習施設を要するはもちろんであります。

さらに本学に課せられた使命より考えますと、広く食品学、栄養学、公衆衛生学、統計学、科学的調理の実技修得等々、総合された研究の府として社会の期待に応え、郷土文化の向上をはからなくてはなりません。かくのごとく本学の希望計画は次から次へ燃ゆる思いですが、要はあせらず、たゆまず、うまず、着々と実行の歩を進め、新時代に即応した理想の栄養短期大学の出現を標榜して、努力奮闘を続ける決心でございます。皆様におかせられても、これを諒とせられ、今後とも相変わらず力強い御支援と御鞭撻を賜わらんことを祈りまして、式辞といたします。

昭和三十二年十一月一日

中村学園理事長

中村栄養短期大学長

中村ハル謹言

清節・感恩・労作女子高校生まれる

中村栄養短期大学を開学して後、学生の学習内容の実際をみると、とても短大二年間には盛り込めないくらいに講義、実験、学外實習がつ

まっています。これではよほど基礎学力を持って入って来ないと実力はつきません。そのためには、短大の下につける予科的な高等学校の必要ということも漠然と考えていました。

そのような考えを持っているところに、私をしてどうしても高等学校設立へ踏み切らせた一番大きな動機は、この中村栄養短大に入ってくる女子学生の生活態度を見たことでもあります。私の短大では、授業終了後の掃除は当然のこととして学生の務めになっていますが、あるとき掃除のしぶりを見ておりますと、雑巾を足の先につっ掛けて使ってみたり、雑巾の絞り方ひとつ知りません。

また先生にお会いしても、会釈の仕方ひとつ知らず、これでは女性としての躰は全く零です。恐ろしい気がしました。

今の高等学校は何をしているのだろう。進学のことや、知育のみで終わって、徳育はほったらかしになっているに違いない。

よし、それでは自分で高等学校をつくって、ひとつ理想的な教育をやってみようと決意したのであります。昭和二十四年ごろのことです。

ちょうどそのころ、草ヶ江にある県立福岡学園が糸島の方へ引越すのではないかとのうわさを耳にしました。さっそく県の方に当たってみました。はつきり決まったわけではなく、いつのことやら予想がつきません。

そうこうしているうちに、幸運にも中村治四郎先生(九州産業大学理事長)が短大事務局長、久雄君のところへ来られ「君の方で高等学校設立の計画があるなら、城西中学の西側に野上辰之助氏が、七、八千坪持っているが相談したらどうだ。君の方で要らんなら僕の方で欲しいくらいだ」と、教えて帰られたと聞きました。渡りに舟とばかり現地

をみると、栄養短大からはわずか三百メートルくらいしか離れておらず、格好の土地なのであります。よく調べてみると、野上辰之助氏は炭坑業で財をなした方で、野上鉱業の会長をしておられることがわかりました。直ちに譲り受けの交渉に入ることになり、結城正雄氏(日活九州支社長)と県会議員の曾我薫先生に野上氏の意向を打診してもらったと、教育事業にその土地が生かされるのであれば条件次第では譲ってもよいとのこと。さうそく事務局長と桜井匡教授(野上辰之助氏とは以前よりの知り合い)をやり譲渡の折衝に入らせました。

折衝も大詰めにきたところで私が出向き、野上氏に会って二十分間で結論を出し、契約を結びました。六、七〇〇余坪を一回目、一回目、三回目に分けて譲渡する云々の内容でした。

これが昭和三十四年五月ごろのことです。

この土地は野上辰之助氏が農地のまま所有され、都合により福岡刑務所に服役中の受刑者のほぜ野菜畑に提供しておられたもので、そのころは一面の櫨の木畑でした。農地ということであれば、これはそのままでは学校の用地にされません。

当時は農地転用は非常に厳しい制限がありました。この許可申請にも事務局は苦労したようであります。許可はなかなか下りませんでした。校舎の建築に早くかからないと、翌年四月の開校に間に合わないようになります。ついにせっぱつまって、また檜橋渡代議士を煩わし、一ときの農林大臣福田哲夫氏を動かして農地転用の許可を急いでいただきました。

さて、校舎建築についてはいろいろと深く考えてみました。今度は思い切って斬新な建築をやってみたい。それにしても、資金は充分ではない。どの建築業者がよいか、いろいろ検討し、結局辻組がよろしか

ろうということになりました。

辻組の社長辻長次郎氏は前からよく知っていましたので、学校に来てもらって相談しました。

「今度の高等学校の校舎はモダンなものを作りたい。辻組さんをお願いしたいと思っている。ただ資金の方は余り持ちませんから、支払いの方は少々延びるでしょうが、それでもやってもらえますか」「中村先生のことですから間違いないと信用しています。ひとつ立派なものをつくりましょう」

と、辻さんは言下に約束してくださいました。

結局、設計は大部、的場、岡田の三者協同で大部設計事務所が直接責任者になり、建築施工は辻組で建築にかかったのです。

ところで、高等学校が発足したあかつきには私が校長で大いに自分の教育理想を実践したいと意気込んでおりましたが、ここで考えなければならぬのは女房役の教頭の人選如何ということでした。

教頭を誤ると、学校運営はうまくいきません。そこでいろいろと考えたすえ、かつて中村割烹女学院で苦勞を共にした末松みさを先生の御長男慶和氏が九大卒業後、学芸大学の先生をしておられ、教育界に顔の広いことを思いつきました。すぐに、慶和氏に来ていただきました。

「今度このような女子高等学校をつくることになりました。先生は九大教育学部の御出身で、県内教育界の人物についても詳しいと思います。九大の教育学部とも相談して教頭適任者を推薦してください」

真面目な末松慶和先生は私の願いに、九大の平塚教授や原教授とも相談され、二・三人教頭候補を持って来られました。しかし、どうも今

一步というところで人物に難点があります。それも駄目、これもどうもと断わるもんですから、末松慶和先生も弱っておられたようです。平塚教授のところは何回も通っておられるうちに、先生から「中村先生の氣にいる教頭はおらんぞ。末松君、いつそ君が行ったらどうだ。そうし給え」ということになり、末松慶和先生は学芸大学助教授の現職を捨てて本校に赴任なさるようになったのです。昭和三十四年秋のことでした。実際の着任は、翌三十五年からになりましたが……。後になって、このときのことを末松先生は頭をかきながら「あのときはとうとうミイラ採りがミイラになってしもつて」とよく笑って話ざれませんが、そういえばその通りです。

このときの末松教頭先生が昭和四十四年九月から二代目校長に就任されたのです。

高等学校を新設するための県あての申請事務を進めるため、坂田政二郎先生、富沢民次先生は早目に就任してもらい、県あての折衝および事務に当たっていただきました。

ここで、特に書き残して、おかねばならないことがあります。

その一つは、この高等学校は私の信念に基づき、女子高等学校として女子教育を専門にしたことであります。私は以前から高等学校、すなわち後期中等教育の段階では、男女別学がよいとの立場に立っていますし、また実際に男女共学の高等学校では男性、女性の本質に基づく人間教育は甚だむずかしいことであると考えております。

その二は、徳育の中心となる徳目を掲げて人間教育を重視する高等学校をつくるということです。この女子高校では清節 清く、正しく、優しく、強く 感恩天地自然の恵みに対する恩・国の恩・君の恩・師の恩・父母・兄弟・姉妹の恩・友の恩などに感謝して生きてい

く労作頭脳を使って働き努力を重ねて生きていくを、その三つの徳目に掲げることになりました。

このような趣旨から、建築の方も第一期工事に引き続いて第二期工事は女子教育に特に必要な家庭系実習室を重点に建設しました。第三期工事は人間教育の道場として講堂を建設しました。次々の建築で事務局長も財政的には随分苦勞したようですが、この間の親戚一同の応援は忘れてはなりません。

幸い教頭以下竹森事務長、それに優秀な教師が次々に揃われ、入学志望者も逐次ふえて学校の基礎も固まった次第です。

その後のことは、ここに改めて記録に止めなくとも皆様御承知のとおりです。

情熱充たす中村学園大学

私の教育に対する欲望と情熱は膨らむばかりでした。それまで栄養短大の実績をみてきた私には、学問研究の深さにおいても短大程度では満足することはできません。やはり四年制の大学でなければ、高度の研究は無理であるとの考えを懐くようになってきました。そのころのことです。高等学校設立のときつやむやになっていた県立福岡学園が、今度は筑紫郡の方へ本当に移るらしいという情報を耳にしました。事務局長に当たらせますと、県の方でもかなり具体的に進めているとのことであります。

すぐ理事会にはかりますと、理事会でも私の考えを理解されて相当の困難は覚悟の上で、中村先生の最後の教育執念を実現しようとして一決しました。

これが昭和三十八年ごろのことです。このころは高等学校の方も軌道に乗っておりますし、中村栄養短大も十年に近い実績を積み、事務組織、教員組織も一応体をなしてきていましたので、私がいちいち細かいところまで手を下さなくとも、それぞれの指示によって事が運ぶようになってきていました。

しかし、それでもこの草ヶ江の県立福岡学園の土地の払い下げについては、そのむずかしさは並み大抵のことではありませんでした。私も三、四回、ときの知事鵜崎多一先生にお会いし、私の教育に対する信念を吐露して訴えたことを忘れ得ません。鵜崎知事も、こと教育のことであればと非常な理解を示してくださいました。この土地の払い下げが本格的に決まったのは、昭和二十九年も暮れがせまってからであります。

細かいことは私の知る由もございませんが、ときの短大の父兄後援会長永島武雄氏の陰の御尽力はとても筆舌に尽くせないものであったと覚えております。一時はこの土地の払い下げは断念した方がよくはないかと思っただくらいでした。土地の話が一進一退ながら進みつつあるとき私は新大学の構想を練りました。食物栄養学科は当然のことです。とすれば、学部は家政学部ということになります。文部省では少なくとも一学部に二学科は設けなくてはいけないと指導されます。このとき天啓のようにひらめいたのは、もう一学科は児童学科だということでした。私が教育者として最後に遺すものは、児童学科しかないとの決論に達したのです。

理事会の席上、この構想を発表いたしましたところ、皆さんはあまりよい顔をされないばかりか、四年制大学で児童学科のあるところが全国で十二、三校あるが、どこも入学志望者が少なく困っているようだ。短大の児童教育科などにはわんさと押しかけているが、四年大学の方は学生の集まりが悪く、ひいては経営上苦勞が多いですよ、との

こと。けれど、私の考えは違います。学校の経営とか、財政のことがどうあれ、とにかく今後の日本に必要なのは健康な身体であり、立派な精神を持った人間なのです。この身体づくりの基をなすのが食物栄養学科であり、人づくりの基をなすのが児童学科との信念を持っています。理事の皆さんもどうかこの私の悲願を理解してかなえてもらいたいと訴えました。皆さんも理事長がそれほどまでに固い御決意であれば、何をかいわん、皆その理想を生かすように協力してやっていこうと決議されました。このようにして学部・家政学部、学科食物栄養学科、児童学科の二学科を設置することになりました。

文部省あての大学新設の設置認可申請についてはこのころはすっかりした事務局ができていましたのでそれほど心配はしませんでした。県立福岡学園の土地の払い下げが文部省で要求される計画通りに行なわれていない理由で、一とん挫あるやに思われました。だが、福岡県関係当局の英断でこれも解決し、あとは何とか順調に運び、昭和四十年一月二十五日付けで文部大臣の認可を得たのであります。

食物栄養学科、児童学科とも、その後優秀な先生方が揃われ、また内部の施設設備も整い、食物栄養学科においてはこの学科をさらに二つの専攻に分離して 食物栄養学専攻 管理栄養士専攻となり、さらに児童学科のために大学付属あさひ幼稚園を開設して今日に至っております。

五月十七日、本学園の創立記念の日をトして大学開学式ならびに第一期新築校舎の落成式を執り行ないましたが、そのときの私の式辞がありますので記録に残しておきます。

中村学園大学開学式ならびに第一期新築校舎落成式式辞

野も山も新緑に包まれる五月晴れのこの佳き日に、中村学園大学の開

学式ならびに第一期校舍新築落成式を挙行いたしますに当たり、文部大臣代理玖村学芸大学長を始め県市御当局、財界の知名士、郷土の知名士、父兄後援会の方々など多数御臨席を賜わり、かくも盛大に式をあげ得ますことはまことに光栄の至りに存じます。

さて、世界の文化はこの二十世紀に於て驚くべき発展を遂げましたが、わけても我が日本は大東亜戦争の敗塵の中から立ち上がり、わずか二十年の間に急速に進歩し、経済、文化に於て世界の一等国と肩を並べるようになりました。そのゆえんは、大和民族の特徴である隠忍自重、奮闘努力によるものであります。しかし、この際われら同胞が心を新たに於て世界の情勢を静観する必要があると思ひます。

現在、文明はなるほど進んではいますが、ひるがえって精神生活は……と考えますと、逆に退歩してはいないかと疑われるのであります。これははき違えている民主主義者と、革命を目的としている共産主義者とが相争い、相かみ合つて、人類社会を騒がせているからではないでしょうか。

人間は他の動物と異なり、精神が最も大切であります。同じく民主主義と申しても、英国には英国式の民主主義があり、米国には米国式の民主主義があるごとく、我が日本には長い歴史と立派な伝統があり、それに国民は愛国の精神に燃えて、今日まで日本国を育ててきたのであります。近来、その民主主義をはき違える人々が多くなり、世の中を混乱させていますが、そのためか不良化青少年の犯罪が増加してきています。

これは戦後、和合を欠いた家庭での母親の教育の不徹底にもよると考えます。ともあれ、私どもは日本国民として進むべき進路を見きわめ、祖国日本の建設を一段と堅固ならしめるためには国民それぞれの立場に於て忠実に努力することが最も大切であります。

私は明治三十五年三月、当時福岡県が日本一の教育県として称揚されていたころ福岡師範を卒業しました。十八歳より教員生活に入りまして、二十六歳のときあたかも福岡県男子師範学校付属小学校訓導時代、弟関次郎が東京高等商船学校航海科在学中結核にかかりましたので、母に死別した私ども姉弟のなかで、私が母に代って弟の病氣治療の一切を引き受けることを決心しました。何とかして弟を全快させたいものと苦心惨たんすること十数年間、しかしその甲斐もなく弟はあの世へと旅立ちました。時に、私は三十六歳。ここで、父や姉と相談のうえ姉の末子久雄氏を私の世継ぎにいただき、私は独身生活を決意、一生を日本一の家庭科教師として立たんと元気を振るって横浜市岡野小学校に赴任しました。昼は学校教師、夜分、日曜、長期休暇には帝国ホテルや雅叙園、さては日本料亭に入り込んでコックとなって調理の技術を磨きました。東京をすませて、次は神戸市明親女子高等小学校の家庭科教師をつとめ、また神戸京都、大阪の一流ホテル、料亭で調理の腕を磨くこと前後十年間。福岡市九州高女の興隆に尽くさんと神戸市教育界を辞して、昭和五年同校に赴任しても長期休暇を利用しては東京、大阪、京都へ出かけてコック生活十八力年間、随分の苦勞でした。

大東亜戦争敗戦後食糧事情が著しく悪く、国民の体位の下落見るにしのびず、料理学校を建てて、食品の合理的な使い方や料理の技術、さては栄養の知識を授けて、少ない材料でより以上の効果をあげる調理法を教えて食糧難を救わんと、昭和二十四年四月に中村割烹女学院を創設しました。入学者引きもきらず、三年後には一千名を突破する盛況でしたが、これが私の私学経営の最初であります。

その後研究の結果、栄養士養成の必要切なるを感じ、昭和二十八年に福岡高等栄養学校を設立、ついで昭和三十二年には同校を母体として中村栄養短期大学を設立し、同時に短期大学教授の資格を得て学長に

就任しました。

かくて、公立高校卒業の女子学生をあずかつて教育を行なっているうちに、高校の男女共学は教育理念にもとる点多々あるをさとり、模範的な女子高校をとという意味でやむなく中村学園女子高等学校を昭和三十五年四月開校いたしました。風をしたらって入学する生徒は九州一円、中国にまたがり、現在では生徒総数二千五百名を突破し、教職員数百十数名を数える大世帯になりました。

ここで、私の胸を打つものが三つあります。その一つは、小、中学、高等学校の少年少女の不良化の何と多いことかということ。いま一つは今回のオリンピックで見せつけられた日本人の体格、体力が、世界のそれよりレベルが低いこと、そしてわが国経済力がまだ低いことでもあります。

私、身を教育に捧げること六十五年、就中家庭科教師として特に食物、育児、家庭経済のこの三科目について格別の研究を積んで今日に至った関係上、最後の国家社会に奉公するのはこのときと立ち上がり、ここに四年制大学家政学部を設立せんと決意、まず児童学科と食物栄養学科を設けることにしました。さっそく理事会にはかりましたところ、教育に格別熱意を持たれる奥村茂敏理事、杉本勝次理事、徳島喜太郎理事、山田、桜井両理事の賛同を得たので、中村事務局長を先頭に、若いそうそうたる事務職員が立ち上がり、すぐ文部省や厚生省あてに設立認可申請書を出すことになり、徹夜の勢いで奮闘した結果が実を結び、第一回で見事パスしたわけであります。

これについて、第一に申し上げておかねばならぬ敷地の件があります。これは五、六年前より私わが中村学園の校舎敷地として目をつけていた福岡学園の移転の跡地で、環境といい、便利といい、大学敷地としては最適であります。また建築の方では、第一期工事は辻組に命じ

て超突貫工事で見事出来上がり、今日落成式を行なう運びに至った次第でございます。かくなつたのは県市御当局の方々、県市会議員、父兄後援会の方々の並々ならぬ御後援の賜で、高いところから深く感謝の意を捧げる次第であります。

中村学園大学という特異の大学が西日本に生まれ、この大学において賢明なる母親を養成し、身体健康、頭脳明断で、立派な日本人を育てうるすぐれた人材の育成と、管理栄養士を養成して今一步高い国民の栄養指導者を育て、教育者としての最後の御奉公をいたす決心でありますので、皆様におかせられましても陰となり陽となつて御指導下さいますよう御願いして、今日の御挨拶にかえます。

昭和四十年五月十七日

中村学園理事長

中村学園大学長

中村ハル謹言

たたえる日の丸の十二徳

昭和三十七年前後のことであります。中村栄養短期大学長と女子高校の校長をも兼ねておりましたが、青少年の非行化の問題とか、戦後教育の荒廃とか、私は私なりに日本の教育のあり方につきいろいろと思ひ悩みました。それが私の思想から発するものか、体験に基づくものか、恐らくその両方が混ざり合ったものでしょうが、何か日本の教育に一本抜けたものがあると漠然と感じていました。

種々思ひ悩み、研究し、考えをまとめているうちに、だんだんとはつきりして参りました。すなわちそれは戦後の教育改革により、我が国には教育基本法なるものが制定されましたが、これは日本人に対する教育観としては何か欠けています。戦前には教育勅語が厳存し、日本

人はかくあつて欲しいという人間理想像が示され、またわれわれもそうありたいものと努力をしてきたはずであります。それが戦後取り除かれてしまつて、われわれ日本人の実践的倫理綱領がなくなつたからに違いないと悟りました。

ちようどそのころ、私は福岡県日の丸会副会長の職についておりました。国旗日の丸についての研究もし、関心が強かつたのであります。日本人と日の丸・日の丸の表現する美しさ・このなかに、私が理想とする日本人としての人間形成目標が示されていると感得したのであります。具体的にいいいますと、国旗日の丸が持っている色や造形を精神的意味にとらえ、これを人間陶冶の徳目として掲げ、日常の徳性酒養のもとにする考えに至つたのであります。私はこの「日の丸の十二徳」を入学式、卒業式、その他の行事ごとに学生、生徒に説き、私の訓話の一部といたしております。

また本学助教授河村順子先生の御世話で「日の丸の歌」を私の責任で制定し、学生、生徒にも愛唱させております。

ここに重複をいとわず「日の丸の十二徳」を記録に残しておきます（略）。

全国料理学校協会会長に就任

昭和三十二、三年ごろには、わが国の料理学校は北は北海道から南は九州まで、数にして三、四百校を数えるほどになっていました。わが国食生活の改善向上に大きく貢献し得る存在になっていたのです。しかし、各個バラバラで統一した力を発揮するまでには至っていませんでした。これではいけない。何とかこの料理学校の連帯を強めようではないかと呼びかけられたのが、食味評論家の多田鉄之助先生。それに中央の日本料理研究家山下茂先生、服部料理学校の服部道政先生等

であります。九州にも呼びかけがあり、私もこれに参画し、全国各地からも主だった料理学校の先生方が集まられて、ここに全国料理学校協会が誕生したのであります。九州の方では、この全国料理学校協会の結成にない、私が中心になって地区組織の結成を呼びかけ、昭和三十四年六月結成のための総会を開き、会員の方々の推挙によって私が全九州料理学校協会会長に就任しました。こうして、私は九州全域の料理学校のお互いの協調と、その発展に尽力しなければならぬ立場に立たされたわけであります。

昭和四十年に全国料理学校協会初代会長多田鉄之助先生が退任なされ、二代目会長に大阪の辻徳光先生が就任され、私はその副会長に推されました。このころから料理学校協会のことで随分遠方に出掛ける機会が多くなりました。昭和四十二年には辻徳光会長が病気で亡くなられた後を受け、全国料理学校協会三代目会長に推されて就任しました。九州の僻地の私が全国の会長に推されたのは、東京と大阪との間に以前からしこりがあり、そのため中立の私が最適任とされたためのもです。ともあれ、この協会内部には以前から地方ごとに利害の複雑な関係があつて、なかなかまとまりがしっくりいきません。私はそのために、何度も飛行機で遠方に出かけ、いろいろのもつれの調停に出なければなりません。そのためとうとう昭和四十三年夏にはもともと悪かつた膝をいよいよ悪くしてしまい、ついに車椅子の厄介になる羽目になったのであります。

努力に光る勲章

昭和三十八年十一月、思いもかけず私は藍綬褒章受章の栄に浴しました。教育功労者としての受章でございました。私ごときものがこのような榮譽に与かるとはと、心から感激いたしました。受章のため上京して天皇皇后両陛下に拝謁したときは、私のような明治生まれの者にとっては膝頭がふるえるほどの興奮をおぼえたものです。宮城内を参

観してよろしいとのことでしたが、私は足が悪いのでとても全部は見
て歩けないと諦めていたところ、ちょうど以前福岡県衛生部にいられ
た宇土条治氏が宮内庁の課長をしておられるのを思い出して連絡をと
りますと、わざわざ出て来られ、車で宮城内を見て回れるように取り
計らって下さいました。重ね重ねの光栄に身の縮まる思いで参観させ
てもらいましたが、陛下が植物研究をなさる研究所などまことに御粗
末なもので、その質素さに恐縮したものです。

昭和四十年十一月、今度は勲三等瑞宝章受章の栄に浴しました。勲記、
勲章は文部大臣から頂き、続いて宮中に参内して親しく天皇皇后両陛
下に拝謁を許され、恐れ多くもねぎらいの言葉まで頂きました。この
ときの感激は終生忘れ得ぬところであります。

それにしても、私ごときものが二度も受章の栄に浴し、教育功労者と
して身に余る榮譽を担ったことは、これはひとえに私をして今日まで
陰に陽に助け、指導し、協力され、後援された多数の方々の賜もので
あって、何とも感謝の言葉もないほどです。私自身、今後とも長生き
してなおいつそう社会のため、わが国教育のためにつくしたいと決意
を新たにしました次第であります。

このごろ、私のところによく教え子から何か色紙を書いてくれとたの
まれます。私はそのときたいい「努力の上に花が咲く」と書くこと
にしております。私の一生が努力の連続でありましたし、その努力が
報いられて今日の私があると思うからであります。そして、そのよう
な生き方がまた、人生の一つの指針にもなればと思うからでもあります。